The effect of personal relationships for child care and partnership at a parent-child relationship -Adolescence-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kimura, Rumiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00052720

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

KAKEN
2003
38
金沢大学

幼少期の親子関係が子育てやパートナーシップとしての対人関係に与える影響　－青年期男女について－

（研究課題番号　　13672450）

平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））
研究成果報告書

平成16年5月

研究代表者　木　村　留美子
（金沢大学医学部保健学科）

金沢大学附属図書館
0400-05009-9

KAKEN
2003
38

平成 13～15 年度　科学　研究費報告書

課題研究

幼少期の親子関係が子育てやパートナーシップとしての対人関係に与える影響　―青年期男女について―

（課題番号 13672450）

	直接経費(千円)	間接経費(千円)
平成13年度	1,600	0
平成14年度	1,000	0
平成15年度	500	0
合計	3,100	0

研究代表者　金沢大学　木村留美子

平成 13 年～15 年度文部科学省研究補助金　(基盤研究（C）(2))

研究課題：幼少期の親子関係が子育てやパートナーシップとしての対人関係に与える影響　―青年期男女について―

（課題番号 13672450）

研究組織

研究代表者：木村留美子　金沢大学医学部保健学科教授

研究分担者：津田　朗子　金沢大学医学部保健学科助手

五十嵐透子　金沢大学医学部保健学科助教授

（平成 13 年度）

研究協力者：河田　史宝　金沢大学教育学部付属中学

金沢大学医学系研究科前期課程

（平成 13 年度）

南家貴美代　熊本大学医学部保健学科助手

金沢大学医学系研究科前期課程

（平成 13 年度）

木村　礼　金沢大学　研究補助職員

成果報告

＜論文＞

・河田史宝(指導教官：木村留美子) 幼少期の Attachment から Internal Working Model へのタイプの移行とこれに影響を及ぼす要因―大学生男女において―、平成 12 年度入学金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻看護学領域母子看護学分野修士論文、2001 年 1 月

・南家貴美代(指導教官：木村留美子)母親の幼少期 Attachment から Internal Working Models へのタイプの移行と育児観、平成 12 年度入学金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻看護学領域母子看護学分野修士論文、2001 年 1 月

・Rumiko Kimura, Akiko Tsuda, Kimiyo Nanke, Aya Kimura
The study on the attachment style of the mother —Six types—,
Journal of the Tsuruma Health Science Society,Vol.27.No.1.Dec.2003.

・津田朗子、木村留美子、南家貴美代、木村礼 母親のアタッチメントスタイルについての研究―混合型―、金沢大学つるま保健学会誌 27 巻 1 号. 2003 年 2 月

＜著書・執筆＞

・木村留美子 子どもって、前田書店、2002 年

・木村留美子 アタッチメントとは、保育界、2002 年 12 月、40－43ｐ.

＜ 新聞掲載 ＞

・親の幼児体験から育児の悩み解決―「親子のきずな」6 分類―、平成 15 年 6 月 26 日、北國新聞（第 1 面）

・親子のきずな 県内 1 万人で調査、平成 15 年 7 月 9 日、北國新聞（第 30 面）

＜ 学会発表 ＞

・河田史宝、木村留美子 子どもとの接触体験が学生の子ども観や対児感情に及ぼす影響、第 20 回日本思春期学会学術集会(広島市) 2001 年 8 月

・河田史宝、木村留美子 大学生の愛着のタイプと幼少期における外傷体験について、第 48 回日本小児保健学会（東京都）2001 年 11 月 18 日

・南家貴美代、木村留美子 母親の Internal Working Models と育児観お

よび育児不安との関連、第 48 回日本小児保健学会（東京都）2001 年 11 月 18 日

- 河田史宝、木村留美子　幼少期 Attachment から Internal Working Model へのタイプの移行（第 1 報）、第 21 回日本思春期学会学術集会（金沢市）2002 年 8 月 23 日
- 西村睦美、木村留美子　幼少期 Attachment から Internal Working Model へのタイプの移行（第 2 報）、第 21 回日本思春期学会学術集会（金沢市）2002 年 8 月 23 日
- 木村留美子、南家貴美代　母親のアタッチメントのタイプと育児観、および育児不安との関連について、第 43 回日本母性衛生学会（旭川市）、2002 年 9 月 6 日
- 南家貴美代、木村留美子　母親の幼少期アタッチメントのタイプから Internal Working Models のタイプへの移行と移行に関わる要因の検討、第 43 回日本母性衛生学会（旭川市）、2002 年 9 月 6 日
- 津田朗子、木村留美子　母親の Internal Working Models と子どものイメージ、第 49 回日本小児保健学会（神戸市）、2002 年 10 月 12 日
- 木村留美子、津田朗子、南家貴美代　母親の Internal Working Model について（１）―判定不能型の特徴―、第 44 回日本母性衛生学会（宇都宮市）、2003 年 10 月 10 日
- 竹俣由美子、木村留美子、津田朗子、南家貴美代　母親の Internal Working Model について（２）―不安定回避型の特徴―、第 44 回日本母性衛生学会（宇都宮市）2003 年 10 月 10 日
- 津田朗子、木村留美子、南家貴美代　母親の Internal Working Model について（３）―混合型の特徴―、第 44 回日本母性衛生学会（宇都宮市）2003 年 10 月 10 日
- 南家貴美代、木村留美子、津田朗子　母親の Internal Working Models のタイプの強さにおける特徴―「安定型」「不安定型」「回避型」について―、第 50 回日本小児保健学会（鹿児島市）、2003 年 11 月 15 日

目次

はじめに
１、研究目的　　———5
２、研究方法　　———6
３、結果と考察　———7
　１）　対象の属性
　２）アタッチメントスタイルとその割合
　３）アタッチメントスタイルと家庭のイメージ
　４）アタッチメントスタイルと親子関係
　５）アタッチメントスタイルと子どもの年齢
　６）アタッチメントスタイルと子どもとの接触体験
　７）アタッチメントスタイルと外傷体験、および受傷時期
　８）アタッチメントスタイルと人との重要な出会い
　９）アタッチメントスタイルと子どもとの接触体験、および対児感情
　９）子どもとの接触体験や対児感情が学生の親像に及ぼす影響
まとめ　　———16
資料
　図１～37　　17

はじめに

厚生白書によれば、近年、子どもたちの人と交わる力の弱まりや、対人関係能力の低下などが指摘されている。その結果、学校や社会におけるいじめや不登校、引きこもり、家庭内暴力などといった対人関係に関わる問題が増加している。特に、青年期は、幼少期の家族関係や対人関係を基盤として、さまざまな人との関わりを通して学習してきた経験から培った、人との関係を通して大人になる為の準備をし、パートナーシップを身につけ、親になるための準備期として重要な時期である。このような青年期の発達課題は、その後の親性の準備にも重要な影響を及ぼすことが考えられる。

Bowlby(1969)によって提唱された愛着理論によれば、乳児は成人との接近や接触を求める生物学的な形成を持って誕生し、生来的に備わった「泣く」「微笑む」「しがみつく」などの機能を駆使して、母親や特定の人に対して接触を求めようとする。その結果、母親も乳児が示すこのような信号により、乳児に接近し、保護しようとする行動が活発化され乳児と接触を持ち相互交渉を行うと述べている。このような養育者との間に形成される情緒的な結びつきをBowlbyは、愛着(attachment)と定義した。アタッチメントは生後直後から生後3～４年の間に形成され、この間の母親の応答性がその後のアタッチメントの質を決定していくと述べている。

また、子どもはこのような愛着対象との具体的な経験を通して、愛着対象が支援に応じてくれる人であるかどうかという愛着対象への接近可能性や情緒的反応性などに関する主観的な表象を内在化させる。同時に、自分が愛着対象者や他者から受容され援助されうる人物であるかという自己に関する表象も相補完的な形で形成する。母親が支持的で応答的であるときに子どもは母親を良いもの、安定したものとして内在化し、それに応じて自分を価値ある存在、愛され助けられる存在として表象化する。一方、母親が非応答的で拒絶的であるとき、子どもは母親を悪いもの、不安定なものとして内在化し、それに応じて自分が愛され助けられるに値しない存在であるとの表象をつくりあげてしまう。Bowlby(1973)は、主として母親との間に形成されたアタッチメントを基盤に自己および他者に関する表象を内在化させる。これ

を内的作業モデル(Internal Working Model，以下IWMと記す)と定義した。また、愛着人物の有効性についての確信、あるいは確信の欠如は、乳児期、児童期、および青年期に徐々に形成されると仮定し、この時期に発達した親に対する期待は、たとえどのような期待であっても、その後の一生を通して、比較的変化することなく持続する傾向があることを述べている。つまり、子どもの頃に形成された愛着対象者への期待は、その後の個人の環境への反応の仕方を決定し、他者に対する期待の原型になることを示唆している。そして、それが、やがては他者や世界についてのIWMとして自分の中に内在化され、その後、人生それぞれの時期を通じてその後の経験と共にIWMを徐々に修正し、更新を繰り返しながら生涯にわたって自分自身の対人関係に作用するとしている。

Ainsworth(1978)らは、新奇場面法（Strange Situation Procedure：以下SS法)を用いた実験的な方法により幼少期のアタッチメントの質を判定する方法を開発し、Bowlbyの理論は実験的にも理論的にも実証されるようになり、以後アタッチメントの研究は急速に発展した。

SS法は、生後1年間以内の子どもが見知らない人のいる実験室で母親と突然の分離を体験し、その後に母親と再会した時の子どもの行動からアタッチメントの質を判定する方法である。母親と再会しても接触しようとせず、分離時に動揺も示さず、再会時に喜びも示さない子どもたちを回避群とし、新奇場面でも母親の存在を信じ、母親を安全の基地として活発な探索を行い、また母子分離場面で悲しみを表すが再会によって容易に泣き止み安定を取り戻す子どもたちを安定群とした。新奇場面への不安が強く分離時に激しく泣き、再会時にもなだめるのが困難な子どもたちを不安定群としてこの3つのアタッチメントのタイプを明らかにした。このような、SS法の考案はアタッチメントの研究に多大の影響を与え、以後アタッチメント研究の多くにこの手続きが用いられるようになった。

日本ではMiyake,K, et al.（1985）が、SS法を用いて日本と他の国の文化的な背景によるタイプの比較を行った。日本では安定群に分類される者が多かったが、それに対してアメリカでは日本に比べて回避群に分類される者が多く、不安定群に分類される者が少ないといったアタッチメントの文化的な

背景による相違が示された。

Hazan. et al. (1987)は、これらの研究を基に青年期から成人期までを対象に大人のアタッチメントスタイルの研究を行った。大人のアタッチメントスタイルには、子どもが母親に対して形成している愛着の質に類似したスタイルがあると考え、それに基づいて成人期の尺度を開発し、青年期から成人期までの対象が恋人とどのような愛着関係を構成するのかを検討した。その結果、大人のアタッチメントスタイルは乳幼児の研究結果と一致しており、幼少期のアタッチメントが大人のアタッチメントスタイルにも影響していることが示唆された。安定したアタッチメントスタイルを形成している者は、自分にとっての重要他者は信用に値すると思う傾向にあり、他者とたやすく親しくなれ　お互いに頼ったり頼られたりすることに満足し、他者に親しくされすぎてもさほど気にかけない傾向にあった。つまり、安定したアタッチメントスタイルを形成している者は、恋愛関係においても肯定的な感情や信頼　情緒的満足によって特徴付けられていることが明らかとなった。一方、回避的なアタッチメントスタイルを形成している者は、自分にとっての重要他者であっても完全には信じることができず、必要以上に近づかれることを拒否する傾向があり、否定的な感情や依存、情緒的満足などの低さによって特徴付けられていた。これは人と密接になることの恐れから生じていると考えられた。また、不安定なアタッチメントスタイルを形成している者は、自信に欠け、自分は人から正当に評価されないと思っており、他者やパートナーは自分と親しくするのを嫌がったり、本当は自分を好きでもないし、いずれは見捨てられるのではないかという思いに囚われ易く、そのため対人関係は否定的な感情や重要他者に執拗にとらわれ過ぎる嫉妬深い愛の形をとるといったことが報告されている。

また、詫摩他(1988)は、大学生男女の愛着スタイル調査において、Hazan et al.の尺度に修正を加えた尺度を開発して調査を行った。その結果、男女の性差は見られず、「安定型（39.4％）」、「不安定型（14.3％）」、「回避型（18.6％）」、どのタイプにもあてはまらないとされた者（27.6％）が確認された。どのタイプにもあてはまらない者のうち、7割が2タイプもしくは3タイプの混合したタイプであることを報告した。そこで、詫摩らはこの結果を

基に、日本版の成人愛着尺度を開発した。これは、被験者の自己評定に基づく一般的な対人関係に関する現在のアタッチメントスタイルを調べるものであり、この尺度を用いて個人の愛着表象と恋愛体験、恋人のイメージ、母親に対するイメージを調査し、Hazan et al.の記述に対応した3つの独立した因子を抽出した。それぞれの因子の特徴は、「安定型」については対人関係のスキルのうまさや相手との関係に対する信頼感、「回避型」は人嫌いと自尊心の強さ、「不安定型」は過度の親和性と相手との関係に対する不安感といった特徴が示された。さらに、青年期および成人期にある人の恋人および母親に対するイメージとアタッチメントスタイルにおいて相関を認め、アタッチメントスタイルは恋人との関係よりも母親との関係に強い関連が見られた。このことから、青年期の恋愛関係においても母親との関係が基礎にあり、子どものアタッチメントスタイルに影響を及ぼしていた。そして、それを基に青年の恋愛関係が形成されることが考えられた。大森ら(1994)は、大学生男女に詫摩ら(1988)の尺度を用いて青年の愛着スタイルと対人態度の関連を調査した結果、詫摩ら（1988）と同様の結果を得ている。酒井（2001）は、大学1年生男女を対象に、青年期の親密な他者としての愛着関係に注目し、青年期の愛着対象としての愛着関係と幼児期の親子関係の関連についての検討を行った。青年期の愛着対象は、全体の90％が友人（66％）、母親（12％）、恋人（12％）であり、この3つの対象の他はきょうだい、父親、祖父母、先生、先輩であることを確認した。また、恋人や友人を愛着表象とした群は、母親を愛着対象とした群に比べて、他者に対する成人期のアタッチメント（以下、成人期AT）の得点が高く、青年期では母親よりも恋人や友人といった同世代を愛着対象とし、青年期における母親からの自立が示唆された。また、就学前の母子関係は、青年期の愛着対象として友人を選択した群よりも恋人を選択した群に影響を与え、就学前の母子関係の安定性が現在の愛着対象への信頼感を強めていることを報告していた。

以上のことから、青年期の愛着表象は、母親から友人や恋人といった同年代の仲間へとその関係は拡大し、青年期の愛着表象とIWMの形成には幼少期の母親とのアタッチメントが重要な影響を与えていることが示唆された。

粕谷ら（2000）は、詫摩他の尺度を用いて中学生のIWMとソーシャル・

スキルとの関連について調査を行った。その結果、安定得点や回避得点の高いタイプのIWMを持つ者はソーシャル・スキルが高く、不安定得点の高いタイプのIWMを持つ者はソーシャル・スキルが低い傾向にあることを示していた。このことから、中学生のIWMとソーシャル・スキルの形成についても親子関係の質が重要であることが示唆された。

幼少期のアタッチメントスタイル（以下、幼少期AT）が、青年期や成人期において変化することについては、Bretherton,（1990）の研究によれば、親との間に不安定なIWMが形成された場合においても、親以外の新たな愛着対象との間の相互作用の連鎖により安定した表象モデルへと徐々に変容することが可能であることを述べている。また、山岸（1997）は詫摩他の尺度を活用し、青年後期から成人初期にかけて同じ対象のIWMのタイプを1991年と1995年で比較した。この4年間にIWMが変化した者と変化しなかった者とを比較し、変化した者には仕事や私生活の好調さ、現在の適応感との関連があったと報告し、良い環境の変化や良い影響を及ぼす重要他者との出会いによってIWMのタイプは変化する可能性があることを示唆している。しかし、青年期後期にIWMのタイプが不安定であった者は、結婚や親子関係など対人関係の改善によって安定性の得点は高くなるがタイプの変化は生じず、IWMが不安定型のアタッチメントスタイルは変化しにくいことを報告している。

また、近年の愛着研究において、Main et al（1990）は、第4の愛着タイプとして、無秩序／無方向型(disorganized/disoriented）を分類し、人に接近したいのか回避したいのか、どちらつかずの状態が長く続いたり、場違いな行動、突然のすくみ、愛着対象に対するおびえなど、不可解な特徴が多くみられる型を示しており、これは従来の愛着理論の中で報告されてこなかったタイプとして注目される。これについては、本研究の予備調査において、いずれのタイプにも判定できない“判定不能”なタイプを見出している。

１．研究目的

以上述べてきたことから、幼少期のアタッチメントはIWMの形成や青年期の対人関係に重要な影響を持ち、青年期の対人関係はその後の青年期の発達課題にも影響をおよぼしている。このような青年期の発達課題に影響を与え

る幼少期のアタッチメントの質はその後のIWMの質に影響し、幼少期のアタッチメントが安定型であってもその後に出会った重要他者や環境の影響によって他のタイプに変化する可能性を持っている。また逆の場合も考えられる。

そこで、他者との対人関係や自分自身の親子関係に問題を抱えた若者が、子どもとの接触体験もないまま親になり、誤った世代間連鎖の中で子育てを行うことから生じる事件が多数報道される昨今、本調査を通して、若者自身が自分の対人関係やアタッチメントスタイルの特徴に気づき、それを改善することによって、他者との良好な関係の再構築をはかり、将来親となるための青年期の課題である親性の準備に寄与することを目的に本研究を行った。

2．研究方法

1）調査対象

対象は、北海道、宮城、山形、石川、東京、埼玉、茨城、千葉、愛知、岡山、山口、熊本、長崎等13県の、大学10校、短期大学4校、専門学校1校の学生男女3500名のうち有効回答数3086名（男子1045名、女子2041名）、有効回答率88.2％である。

2）調査時期

調査期間は平成13年9月から平成14年4月までの7ヶ月間である。

3）調査方法

①予備調査

本調査に先立ち、同意の得られた国立K大学の1年から4年の大学生男女465名を対象に予備調査を行い、質問項目の検討を行った。

②本調査

本研究は、無記名による自記式質問紙による量的記述的調査法である。調査は各大学、短期大学、専門学校の担当教官に研究の趣旨、方法について説明し了解を得た後、調査を依頼した。対象者には、質問紙に調査の目的および自由意志による参加である趣意書を添付し、担当教官から口頭による説明も行った。対象者は、調査に同意の得られた1年生から4年生までの学生で、講義前あるいは講義後に質問紙を配布し、無記名で回収した。

4）調査項目

対象の属性については、①年齢、②性、③小学校までの家族形態、④きょうだいの有無と人数である。

調査項目は⑤小学校までに育った家庭のイメージ、これについては予備調査の自由記述の結果から、選択肢を設定した。⑥過去と現在の親子関係、⑦高校卒業までに子どもの世話や遊びを通して関わった経験の有無、⑧現在までに他者から受けた身体的、精神的に心に残るような受傷体験の有無(以下、外傷体験)とその時期、⑨中学校卒業以降、自分の生き方に影響を及ぼした、良好な人との出会いの有無(以下、他者からの影響)、⑩SD 法による子どものイメージ、⑪「子ども」という言葉からイメージする年齢と自分自身が子どもであったと考える年齢、⑫将来、親になった時にどのような親になりたいかについて、⑬アタッチメントなどである。アタッチメントに関しては、幼少期アタッチメントスタイル(以下、幼少期 AT)の判定には青柳ら（1997）の尺度を、成人期アタッチメントスタイル(成人期 AT)の判定には詫摩ら（1988）の尺度を活用した。幼少期のアタッチメントの調査は、親あるいはそれにかわる重要他者との関係を思い起して記入する想起法による調査であり、成人期のアタッチメントは現在の対人関係を調査したものである。いずれもすでに項目の妥当性等を重ねられたものであるが、予備調査の段階で構成概念妥当性の検討を因子分析(主因子法、バリマックス回転)により、内部相関の確認は Pearson の相関係数を求め、項目の内的整合性は Cronbach's による α 係数により項目の確認を行って本調査を実施した。

結果の分析には調査用紙を回収後、データの整理を行い、統計プログラムパッケージ「SPSS for Windows 12.0J」を活用し分析を行った。割合分析には χ^2 検定、得点比較には t-test を行った。

3．結果と考察

1）対象の属性

対象の年齢は、男子が 19.6 歳±1.4 歳、女子は 19.8 歳±2.1 歳で、専攻は保育学専攻 320 名（男子 37 名、女子 283 名)、教育学専攻 722 名（男子 238

名、女子 484 名)、看護学専攻 724 名（男子 91 名、女子 633 名)、理・薬学専攻 447 名（男子 47 名、女子 400 名)、文･法学専攻 294 名（男子 197 名、女子 97 名)、工学専攻 400 名（男子 360 名、女子 40 名)、無記入 179 名（男子 75 名、女子 104 名）の合計 3086 名である。

家族構成は、核家族 1967 名（63.7%）拡大家族 1054 名（34.2%)、無記入 65 名（2.1%）である。

きょうだいの数は平均 1.5 人（範囲 1～7 人）で最も多いのが 2 人きょうだいであった。

子どもとの接触体験がある者は 2291 名(74.6%)、ない者は 782 名(25.4%)と接触体験のある者が多かった（$p<0.001$)。

2）アタッチメントスタイルとその割合

調査の結果、従来の愛着理論で述べられている３つのタイプ、すなわち他者と良好な対人関係を形成するのに困難さを感じないタイプとしての「安定型」、他者と良好な対人関係を容易に形成できない、また人に対する好みが激しいタイプである「不安定型」、他者との関係を形成するのに距離を置く、あるいは他者との関係を回避しようとするタイプの「回避型」が抽出された。また、以上の 3 タイプを基礎に、「不安定型」と「回避型」の両方の特徴を併せ持つタイプとして「不安定回避型」、「安定型」と「不安定型」の２つの特徴を併せ持つ、あるいは「安定型」と「回避型」の２つの特徴を併せ持つ、または「安定型」と「不安定型」、そして「回避型」の 3 つの特徴を併せ持つタイプとして「混合型」、いずれの特徴も顕著でない「不明瞭型」の 3 タイプが新たに分類され、６つのアタッチメントスタイルが明らかとなった。そこで、この 6 タイプのアタッチメントスタイルに基づいて、男女別に幼少期･成人期のアタッチメントスタイルの比較を行った。

男子学生の幼少期のアタッチメントスタイルについては、「安定型」が 25.7%、「不安定型」が 15.1%、「回避型」が 14.9%、「不安定回避型」が 18.4%、「混合型」が 18.9%、「不明瞭型」が 7.0%であった（図１)。女子学生は「安定型」が 32.5%、「不安定型」が 6.4%、「回避型」が 18.1%、「不安定回避型」が 8.0%、「混合型」が 18.4%、「不明瞭型」が 16.6%であった（図２)。

幼少期 AT は、男子学生の方が女子学生に比べて「不安定型」、「不安定回避型」の割合が多く、女子学生は「安定型」、「回避型」、「不明瞭型」の割合が多かった。両者の間には有意差がみられた（$p<0.001$）。

成人期のアタッチメントスタイルについては、男子学生の「安定型」が23.7%、「不安定型」が 12.6%、「回避型」が 12.8%、「不安定回避型」が 14.5%、「混合型」が 28.3%、「不明瞭型」が 8.1%であった（図３）。女子学生は「安定型」が 21.7%、「不安定型」が 17.9%、「回避型」が 13.2%、「不安定回避型」が 15.0%、「混合型」が 23.7%、「不明瞭型」が 8.5%であった（図４）。

成人期 AT は、男子学生の方が女子学生に比べて「安定型」、「混合型」の割合が多く、一方女子学生は男子学生に比べて「不安定型」の割合が多かった。両者の間には有意差がみられた（$p<0.001$）。

男女それぞれに幼少期 AT から成人期 AT へのタイプの移行の割合を比較すると、男子では「不安定回避型」が減少し、「混合型」が増加しており幼少期以降の環境の中で他者との良好な対人関係を形成できるようになった者が増加していた。女子は幼少期の「安定型」、「回避型」、「不明瞭型」の割合が減少し、「不安定型」、「不安定回避型」、「混合型」が増加していた。

幼少期から成人期へのアタッチメントスタイルへの移行については、男子に比べて女子の方がマイナス方向に移行する傾向の強いことが示された。

男子の成人期 AT に占める幼少期 AT の割合は、成人期 AT が「安定型」、「不安定型」、および「不明瞭型」の場合に幼少期 AT が「安定型」であった者が多く、特に「安定型」に占める割合が最も多かった。成人期 AT「回避型」と「混合型」の場合に幼少期 AT の占める割合は「不明瞭型」を除けばどのタイプも比較的均等な割合であった。「回避型」は幼少期 AT「不明瞭型」の占める割合は他の成人期 AT の中では最も多い割合を示していた。成人期 AT「不安定回避型」は幼少期 AT も同じタイプである割合が最も多かった（図５）。女子では、成人期 AT が「安定型」、「不安定型」、「混合型」、および「不明瞭型」の場合には幼少期 AT「安定型」の占める割合が最も多く、成人期 AT「回避型」では「回避型」と「不明瞭型」の割合が多く、「不安定回避型」では「回避型」の割合が最も多かった（図６）。

このように、男子学生と女子学生の幼少期 AT から成人期 AT へのタイプ

の移行の割合には顕著な相違がみられ、男子学生のアタッチメントスタイルでは「安定型」「不安定回避型」「不明瞭型」が幼少期のまま移行しない者の割合が多く、女子では「安定型」の半数は幼初期のまま移行していなかった。したがって、「安定型」は男女共に他の成人期スタイルに比べて幼少期 AT の「安定型」が維持される傾向にあることが明らかとなった。また、成人期 AT「不明瞭型」も男女共幼少期に「安定型」を形成している者の割合が多く、成人期 AT「不明瞭型」はその根底に「安定型」を形成していることが明らかとなった。

3）アタッチメントスタイルと家庭のイメージ

家庭のイメージについては、予備調査の自由記載から「あなたが育った家庭はどのような家庭であったか」を尋ね、ここから抽出された項目を選択肢として設定した。「明るく楽しい家庭」、「安心できる家庭」、「平凡な家庭」といった子どもにとって良好なイメージ、「ほったらかしの家庭」、「ばらばらな家庭」、「居心地の悪い家庭」といった子どもにとってマイナスのイメージ、そして良好であるともそうでないとも判断が困難ではあるが、どちらかと言えば子どもにとってマイナスイメージの強い「しつけが厳しいだけの家庭」の 7 項目を設け、アタッチメントスタイルとの関連をみた。その結果、幼少期 AT は男子が「不安定型」、「不安定回避型」を除くタイプは良好な家庭のイメージを抱いている者が圧倒的に多かった（図 7）。女子では「安定型」、「混合型」、「不明瞭型」は良好な家庭のイメージが圧倒的に多かった。「不安定回避型」はマイナスイメージである「しつけが厳しい家庭」との回答が多かった(図 8)。成人期 AT では男女とも家庭のイメージの捉え方は類似していたが、男女とも成人期 AT の「不安定回避型」は家庭のイメージがマイナスイメージの割合が多かった。男女で家庭のイメージを比較すると、女子の方が男子に比べていずれのタイプにおいても家庭のイメージを良好に捉えていた（図 9・10)。また、家庭のイメージに関しては、幼少期の方が家庭の影響を強く受けるため、成人期 AT よりも幼少期 AT との関連が強くみられた。成人期ではその後の体験から男女とも家庭のイメージを良好に捉えるように変化していた。

4）アタッチメントスタイルと親子関係

アタッチメントスタイルと親子関係では、「昔も今も親と仲がよい」、「昔は親と仲がよく今はよくない」、「昔は親と仲が悪く今はよい」、「昔も今も親とは仲が悪い」、「いずれでもない」の 5 項目の選択肢を設けた。「昔も今も親と仲がよい」と答えた者は、男子は幼少期 AT「不安定型」と「不安定回避型」が最も少なく、「いずれでもない」と答えた割合も他のタイプに比べて多かった(図 11)。女子は「昔も今も親と仲良い」と答えた者は「安定型」、「混合型」が多く、「不安定型」、「回避型」、および「不安定回避型」は他のタイプに比べて「いずれでもない」と答えた割合が多かった(図 12)。成人期では男女とも「昔も今も親と仲良い」と答えた者の割合は幼少期よりも多くなっていた（図 13･14)。また、幼少期･成人期共に男子学生は女子学生に比べて親との関係を「良くも悪くもいずれでもない」と回答している割合が多く、男子学生は女子学生に比べて親との間に距離を置きたい、関わりたくないといった傾向が強くうかがえた。

5）アタッチメントスタイルと子どもの年齢

「何歳までを子どもと考えるか」について、学生の子ども一般に対する年齢を確認した。子ども一般に対する年齢を 0～10 歳、11～15 歳、16～20 歳の 3 分類に区分し、アタッチメントスタイルとの関連を検討した。成人期 AT 別に、男女で子ども一般に対する年齢の相違を比較したところ、「回避型」の男子は、他のタイプに比べて 0～10 歳までを子どもと答える割合が多く、11～15 歳までの割合は最も少なかった（図 15)。

また、「自分自身は何歳まで子どもだったと思うか」との問いに対してはすべてのタイプが子ども一般に対する年齢よりも高い年齢までを回答し、さらに回答の内容もタイプや男女により大きく異なっていた（図 16)。子ども一般に対する年齢では男女共に 90％前後の者が 15 歳までを子どもと答えているのに対し、自分自身が子どもであった年齢については 11 歳～20 歳までと答えた割合が最も多かった。20 歳を過ぎた現在もまだ子どもであると答えた者もいた。自分は 15 歳まで子どもであると答えた割合が最も少なかったのは男子の「不明瞭型」であり、女子では「安定型」以外のタイプであった。また、現在もまだ子どもと答える割合が最も多かったのは男子の「不明

瞭型」で、最も少なかったのは女子の「不明瞭型」であった。

6）アタッチメントスタイルと外傷体験、および受傷時期

外傷体験とは、現在までに他者から身体的、精神的にこころに残るような受傷体験をしたその有無(以下、外傷体験)についてたずねた項目であり、外傷体験のある者についてはその時期についても尋ねた。外傷体験は男子よりも女子に多く(図 17)、アタッチメントスタイルとの関連ではタイプにより外傷体験のある者の割合に相違がみられ、男女ともに「不安定型」と「不安定回避型」の割合が多かった(図 18)。また、幼少期と成人期 AT の比較では男子は幼少期の「不明瞭型」の割合が成人期よりも多く、女子では「混合型」を除くすべてのタイプにおいて幼少期の割合が多くなっていた（図 19)。

以上のことから、外傷体験については、男子よりも女子に外傷体験の割合が多く、男子の外傷体験は成人期 AT の特性との関連の方が強く、女子の外傷体験は成人期 AT よりも幼少期 AT の特性に影響を受け、対人関係の問題を生じていることが示唆された。つまり、幼少期に形成された親からの世話の質は世代間連鎖として男子よりも女子の方に強い影響を与えていることが考えられた。

女子の外傷体験の受傷時期を成人期 AT からみるとの「安定型」と「回避型」、および「不明瞭型」は中学時代の受傷体験が多く、その他のタイプは小学時代の体験が多かった(図 20)。

7）アタッチメントスタイルと人との重要な出会い

中学校卒業以降に自分の生き方に影響を及ぼした、人との重要な出会いの有無(以下、他者からの影響)では、男子の成人期 AT は「回避型」の割合が最も少なく、女子は「回避型」と「不明瞭型」の割合が少なかった。一方、人との良い出会いを多く経験しているのは男女共に「安定型」や「混合型」であった（図 21)。

8）アタッチメントスタイルと子どもとの接触体験、および対児感情

高校までに世話や遊びを介して子どもと接触する機会が得られた学生の割合は、男子 66.0%、女子 79.0%で男子よりも女子の割合の方が多かった。

そこで、成人期 AT との比較を行ったところ、男子においては「回避型」、「不安定回避型」および「不明瞭型」の者は、他のタイプに比べて接触体験

が少なかった（図 22）。女子ではいずれのタイプにおいても 70％以上の者が子どもとの接触体験があったが、「回避型」と「不明瞭型」の割合は他のタイプに比べて少なかった（図 23）。

また、子どもに対する「好き」、「嫌い」、「苦手」、および「好きでも嫌いでもない」といった感情(以下、対児感情)について、成人期 AT との比較を行ったところ、男女共にタイプによる顕著な相違がみられ、いずれも「回避型」と「不安定回避型」に子どもが「好き」と答えた割合が少なく、男子では半数に満たなかった（図 24・25）。

そこで、学生の対児感情を接触体験との関連から比較すると、男女共に接触体験の機会を得られた学生の方が子どもに対する好感情を抱くことが示唆された（図 26）。しかし、これについては、子どもを「好き」な学生の方が子どもとの接触の機会を多く持つことが予想されるため、さらに以下の分析を加えた。

男子の幼少期 AT 別に対児感情と接触体験の有無を比較したところ、いずれのタイプにおいても子どもとの接触体験のある者が多く、それぞれのタイプで接触体験の無い者との間に対児感情の相違が顕著に見られた。接触体験のない者では特に「不安定型」、「不安定回避型」、「不明瞭型」の子どもに対する好感情が低かった（図 27）。

男子の成人期 AT 別に対児感情と接触体験の有無を比較したところ、「安定型」は子どもとの接触体験の有無に関わらず子どもに対する好感情の割合が多く、「不安定型」、「混合型」、および「不明瞭型」は接触体験の有無による対児感情の相違が顕著にみられ、接触体験のある者は無いものに比べて子どもに対する好感情が増加していた（図 28）。

女子の幼少期 AT 別に対児感情と接触体験の有無を比較した結果、いずれのタイプにおいても接触体験のある者が多かったが、「回避型」、「不安定回避型」、および「不明瞭型」は接触体験の無い者との間に対児感情の相違が顕著に見られ、接触体験のない者は子どもに対する好感情の割合が少なかった（図 29）。

女子の成人期 AT 別に対児感情と接触体験の有無を確認した結果、「安定型」は子どもとの接触体験の有無に関わらず子どもに対する好感情の割合が

多かったが、その他のタイプは接触体験による対児感情の相違が顕著で、接触体験の無い者はある者に比べて子どもに対する好感情が少なかった。しかし、子どもとの接触体験を持っても「回避型」と「不安定回避型」は子どもに対する好感情は他のタイプに比べて少なかった（図 30)。

異年齢者との関わりが少ない核家族の中で育ち、きょうだいの数も少ない中で育った学生に、将来親となるための準備として、子どもとの接触の機会を設けることは重要であるが、子どもの特性理解のために、子どもとの接触体験の機会を保障するだけではなく、アタッチメントスタイルによっては子どもに対する感情が変化しにくいタイプもあることを考慮に入れた対応が必要であると考える。

9）子どもとの接触体験や対児感情が学生の親像に及ぼす影響

将来の親象については、男女ともに「子どもから信頼される親」の回答が最も多く、この項目に関しては女子よりも男子の方に有意に高くなっていた（$p<0.01$)。「自分の親のような親」($p<0.05$)、「安らぎを与えられる親」($p<0.001$)、「子どもと向き合える親」($p<0.01$)、「子どもの気持ちを理解する親」($p<0.001$)、「友達のような親」($p<0.001$）の 5 項目についてはすべて女子の方が有意に高かった（図 31)。

子どもとの接触体験の有無と将来の親像の関係については、男子では「しつけのできる親」($p<0.05$)、「自分の親のような親」($p<0.05$)、「子どもと向き合える親」($p<0.001$)、「子どもの気持ちを理解する親」($p<0.05$)、「両親が仲よい親」($p<0.05$)の項目に接触体験との間に相違がみられ、いずれの項目も接触体験のある者に多くなっていた（図 32)。女子では接触体験の有無による相違が見られた項目は「自分の親のような親」($p<0.05$)の 1 項目であった。男子は子どもとの接触体験を持つことによって子どもの特性理解が深まり、親としてのあり方を考えさせられることが示唆されたが、女子は子どもとの接触体験が自分自身の将来の親像に大きな影響を受けていなかった（図 33)。

対児感情と将来の親像については、男子では対児感情による相違が見られた項目のうち「自分の親のような親」($p<0.05$)、「子どもと向き合える親」($p<0.05$)、「子どもの気持ちを理解する親」($p<0.001$)と回答した学生は子

どもが「好き」と答えた学生で、「親にはなりたくない」($p<0.01$)や「将来どのような親になりたいかについては想像できない」($p<0.01$)と答えた学生は子どもに対する好感情を抱いていない学生たちであった（図 34)。女子では、対児感情による有意差が見られた項目のうち「安らぎを与えられる親」($p<0.05$)、「子どもの気持ちを理解する親」($p<0.001$)、「子どもと向き合える親」($p<0.05$)、そして「友達のような親」($p<0.05$)と答えた学生は子どもが「好き」と答えた学生であり、「普通の親」($p<0.01$)、「親にはなりたくない」($p<0.001$)、「想像できない」($p<0.001$)と答えた者は子どもに対する好感情を抱いていない学生たちであった（図 35)。

以上述べたように、男女で対児感情によって自分の将来の親像に対する思いは異なっていたが、「親になりたくない」や「自分が親になることなど想像できない」といった否定的な印象を持つ者は男女共に子どもに対する好感情を抱けない者たちであった。

幼少期 AT と将来の親像については、「安らぎを与えられる親」の項目で有意差がみられ、「回避型」と「不明瞭型」の割合が最も少なかった。他の項目では有意差はみられなかったが、「自分の親のような親になりたい」と答えた割合は他のタイプに比べて「安定型」に多かった（図 36)。

成人期 AT と将来の親像については、タイプによる相違はみられなかったが、「自分の親のような親になりたい」では幼少期と同様に「安定型」に多く、「子どもの気持ちを理解できる親になりたい」では「不安定型」の割合が他のタイプに比べて多かった（図 37)。

以上述べたように、男女で将来の親像に対するイメージに相違があり、接触体験の有無が将来の親像に与える影響は女子よりも男子に大きく、男子は子どもとの接触体験や経験を通して子どもを知ることにより、親はどのようにあるべきかといった将来の親像に対するイメージ化が容易になるものと思われた。また、対児感情と将来の親像については男女とも子どもに対する好感情を抱いている者は親像のイメージ化が肯定的で、そうでない者は「親にはなりたくない」や「自分の将来の親像を想像できない」といった否定的な思いが強かった。また、自分自身の親像とアタッチメントスタイルとの関連においては顕著な相違はみられなかったが、親子関係とアタッチメントス

タイルとの間には強い関連があった。

したがって、学生の親性の準備では、子どもとの出会いを通して大人としての自分の姿を見つめられるような機会を保障し、またその体験から学生自身が自分の親との間にどのようなアタッチメントを形成していたのかを見直し、そして、現在他者に対して自分はどのようなアタッチメントを形成しているのかといった自分自身の対人関係の特徴をも考える機会になるような働きかけが必要であると考える。そして、今後、学生自身が親となり、子育てを共有するパートナーとの間にどのようなパートナーシップを形成すべきかについても考えることのできるような周囲からのサポートが必要であると考える。

まとめ

本研究において、6タイプのアタッチメントスタイルが抽出され、それぞれのタイプの持つ対人関係の特徴について述べた。これまでの愛着理論によればアタッチメントスタイルはひとつのタイプで個人の持つ特徴を説明してきたが、本研究において新たに抽出されたタイプは異なるタイプが複合した混合型であり、人間の持つ多面的な特徴を考えれば、このような複合型のアタッチメントスタイルを併せ持つ者が存在するのは当然のことであると考える。

また、幼少期に自分の親との間に形成されたアタッチメントスタイルは、その後の置かれた環境により修正・更新されるが、最も変化を生じないタイプは男女共に「安定型」と「不安定回避型」であった。

今後、さらに詳細なアタッチメントスタイルの検証を進め、将来親となる青年期の親性の準備のために、また現在子育て中の親のよりよい親子関係や対人関係の再構築の一助にしたいと考えている。

資　料

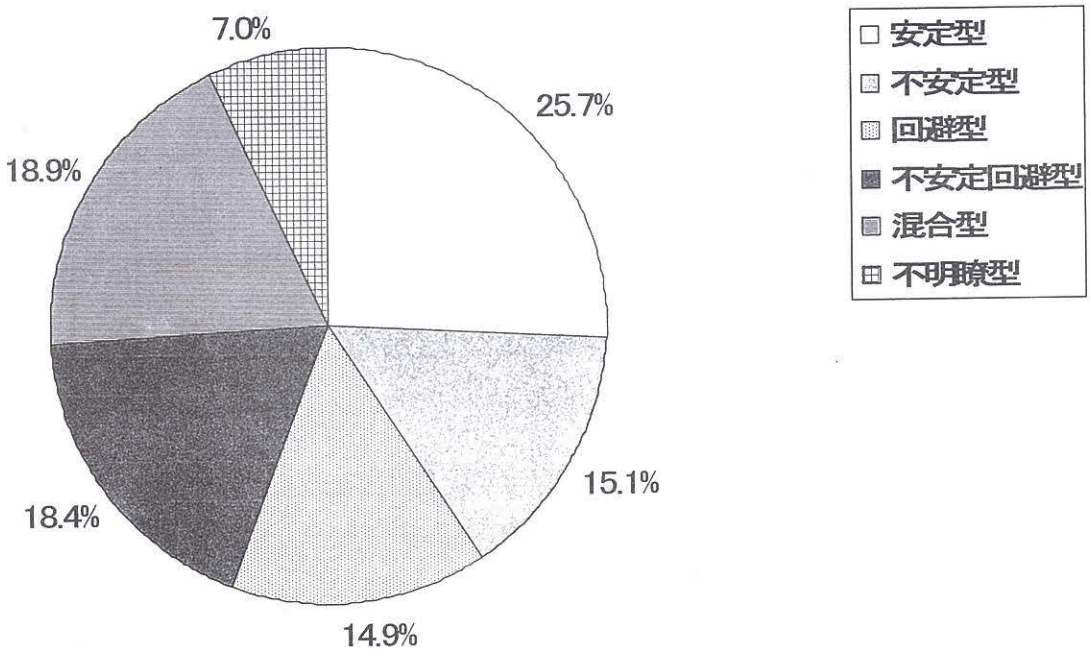

図1. 男子学生の幼少期アタッチメントスタイルの割合

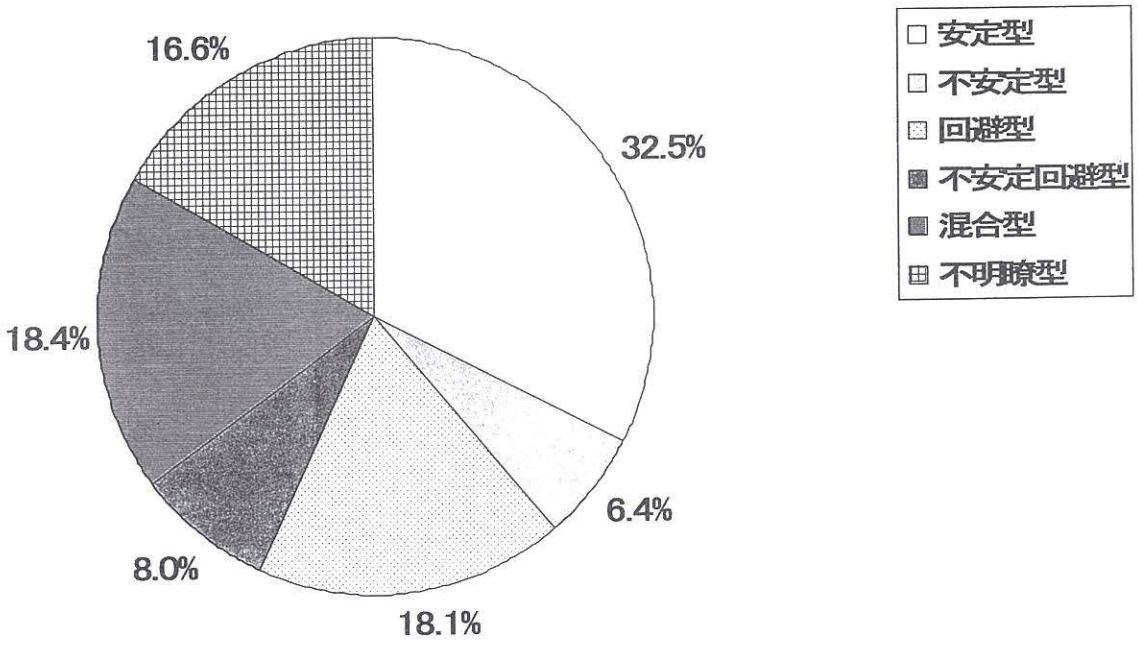

図2. 女子学生の幼少期アタッチメントスタイルの割合

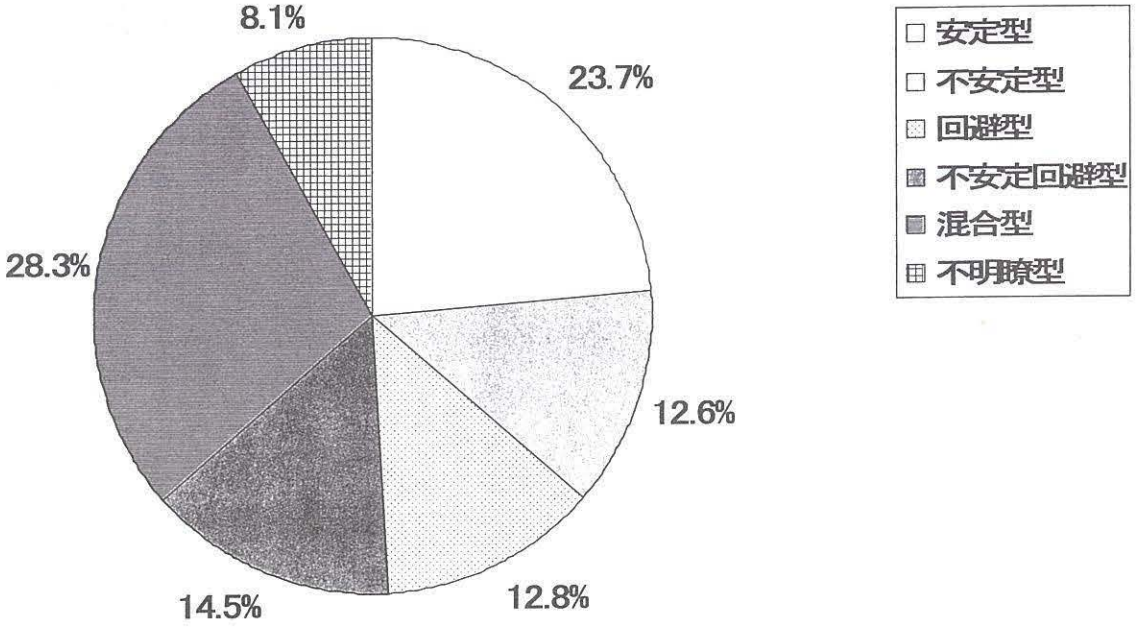

図3. 男子学生の成人期アタッチメントスタイルの割合

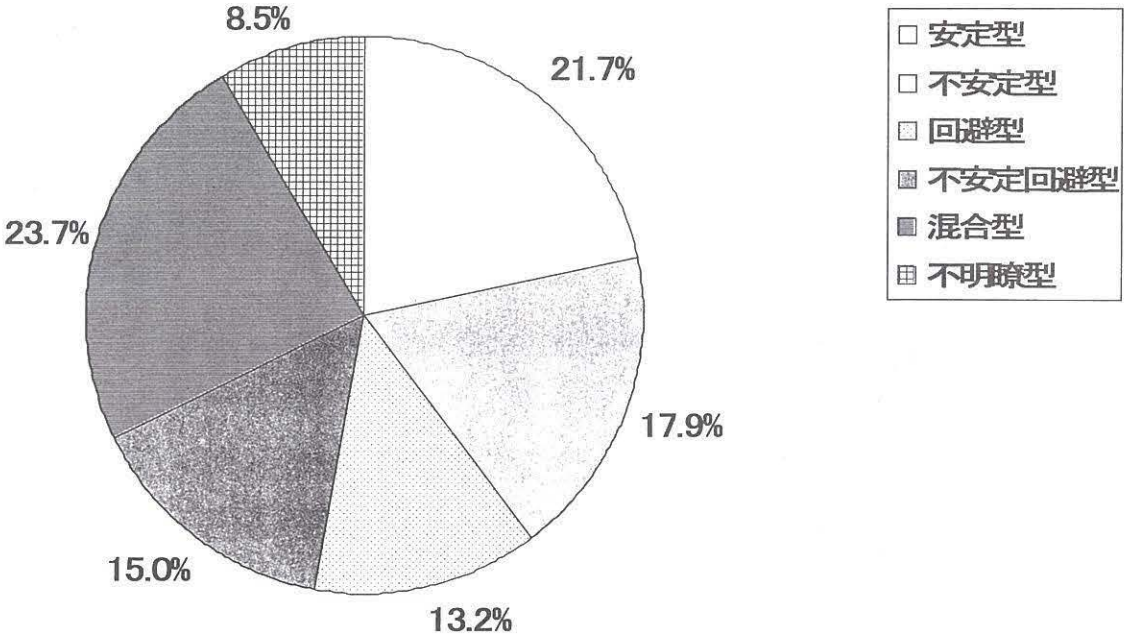

図4. 女子学生の成人期アタッチメントスタイルの割合

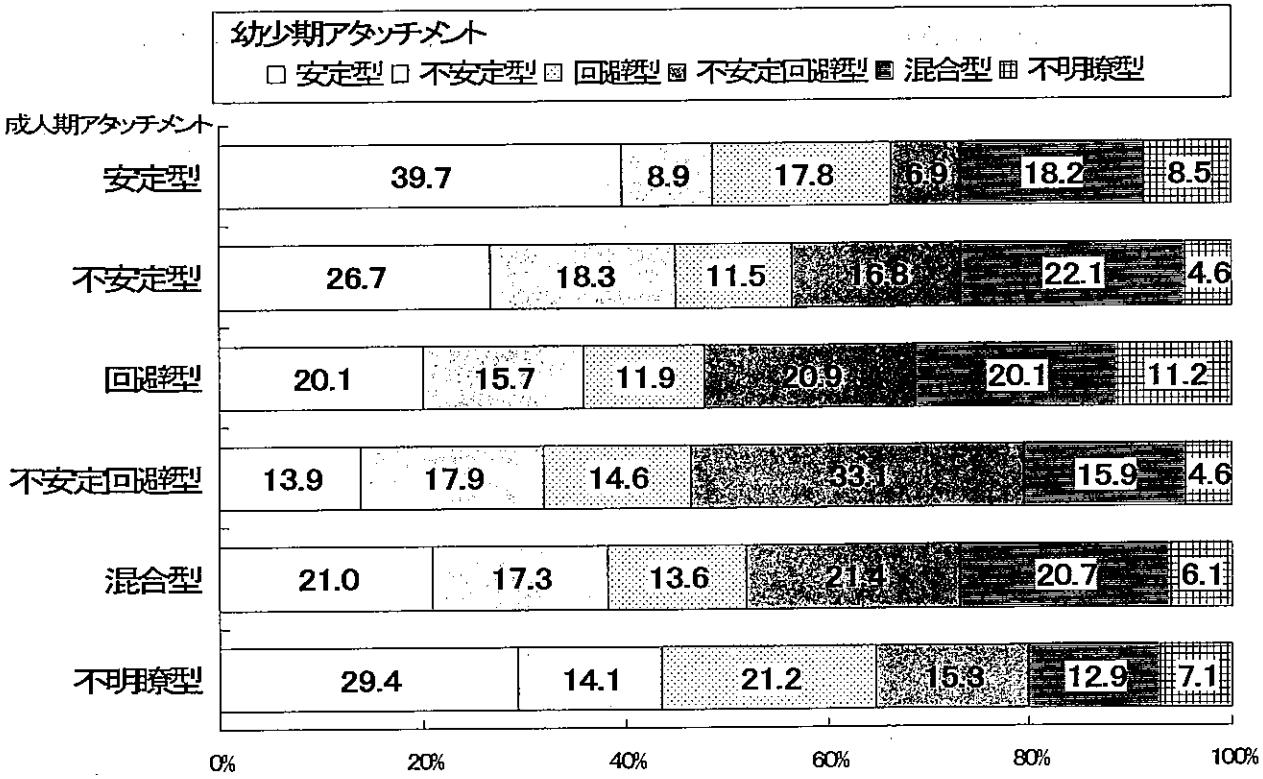

図5. 男子学生の成人期アタッチメントに占める幼少期アタッチメントの割合　(n=1043)

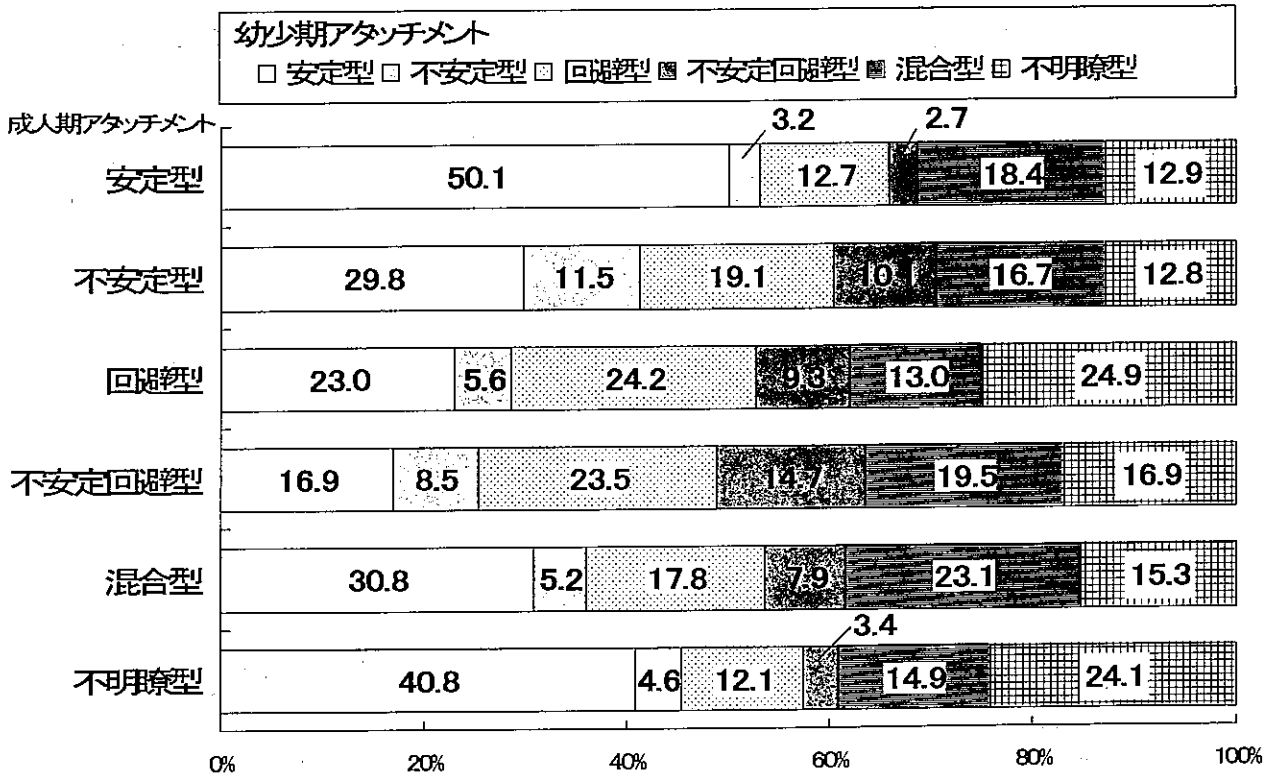

図6. 女子学生の成人期アタッチメントに占める幼少期アタッチメントの割合　(n=2041)

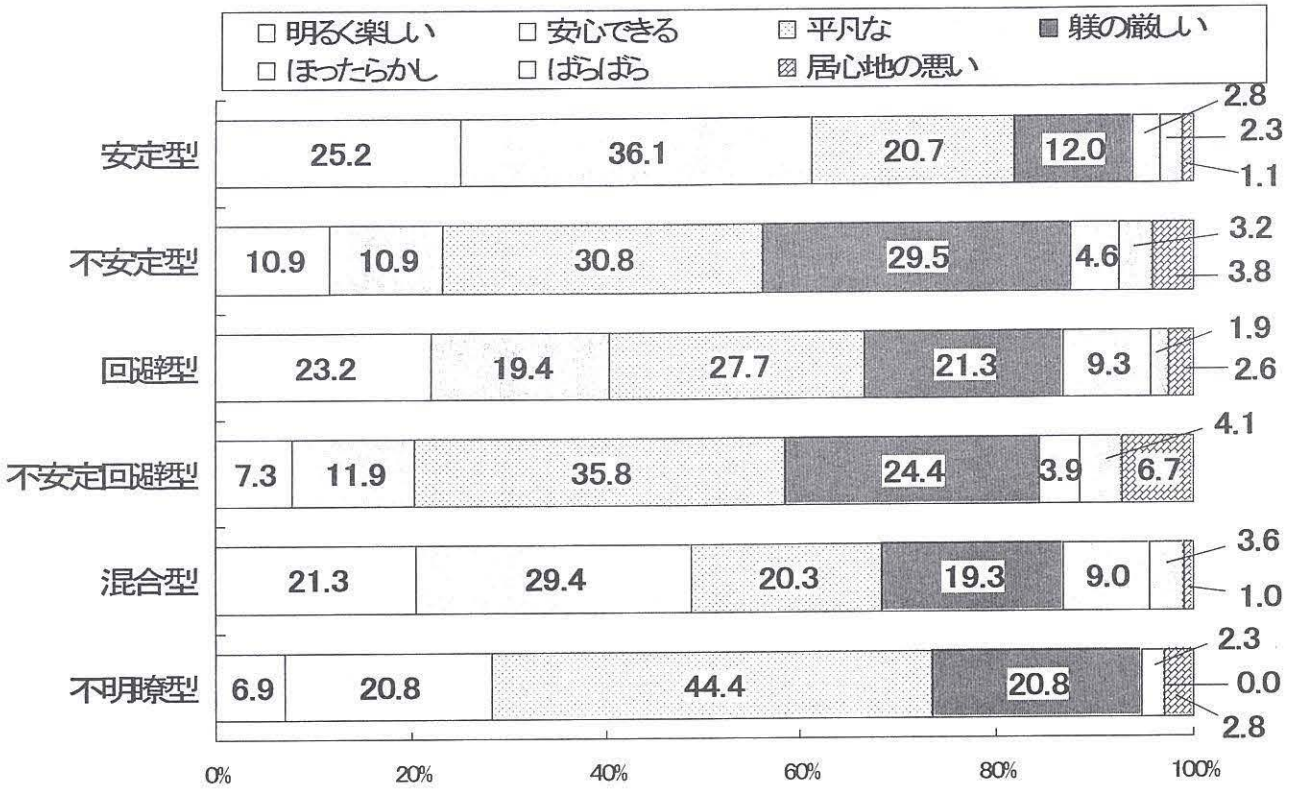

図7. 男子学生の幼少期アタッチメントと家庭のイメージ

（P＜0.001）

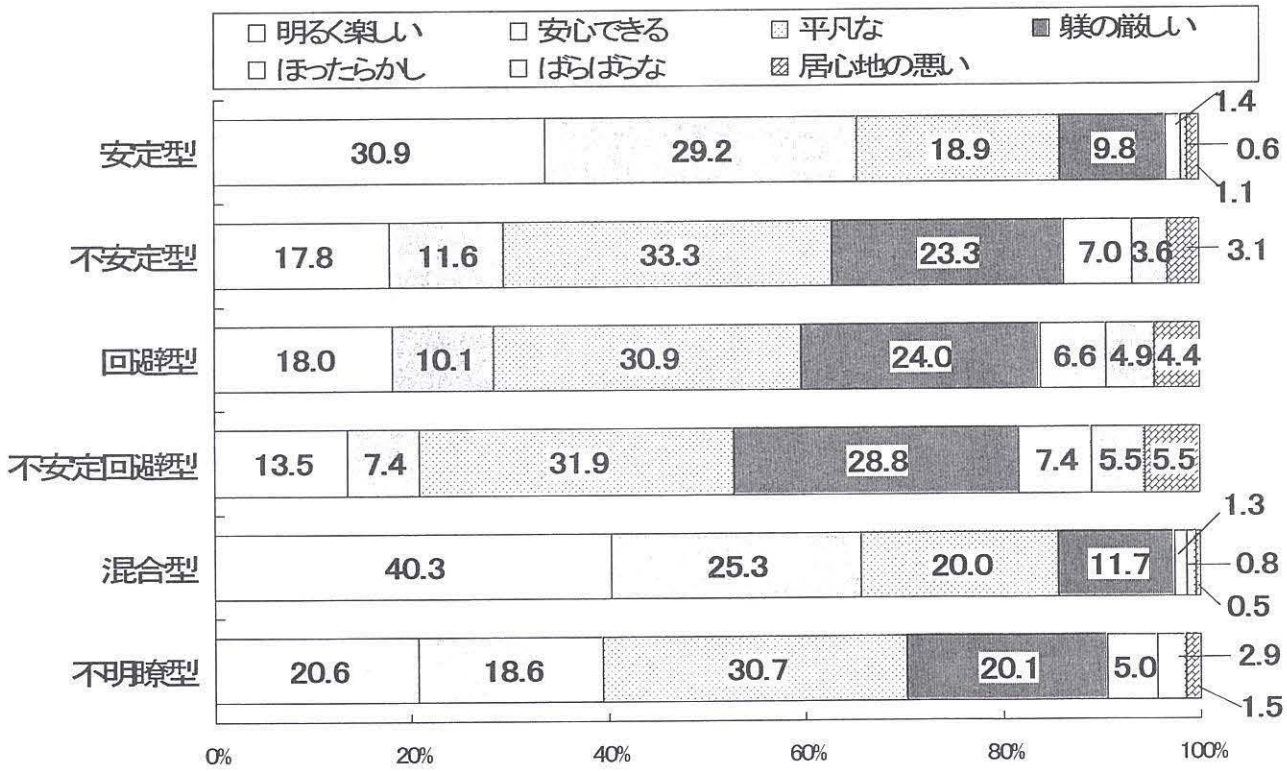

図8. 女子学生の幼少期アタッチメントと家庭のイメージ

（P＜0.001）

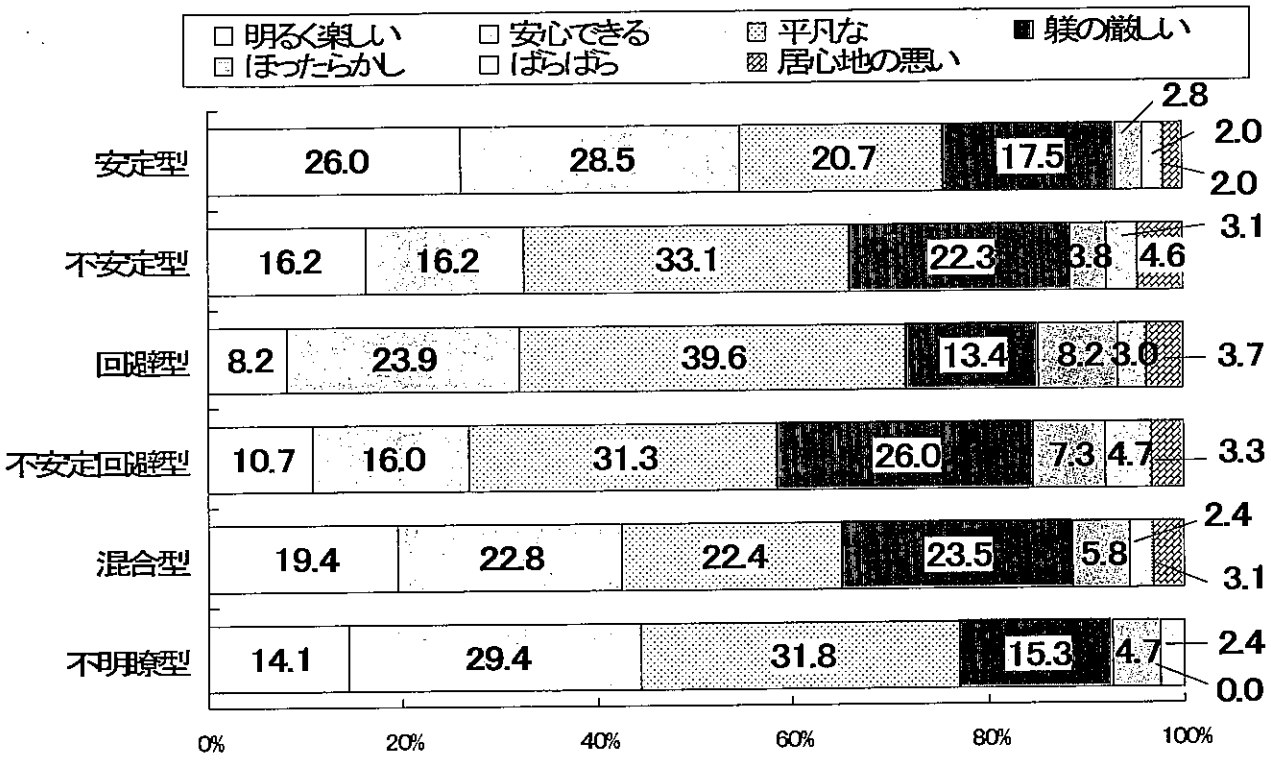

図9.男子学生の成人期アタッチメントと家庭のイメージ

(P＜0.001)

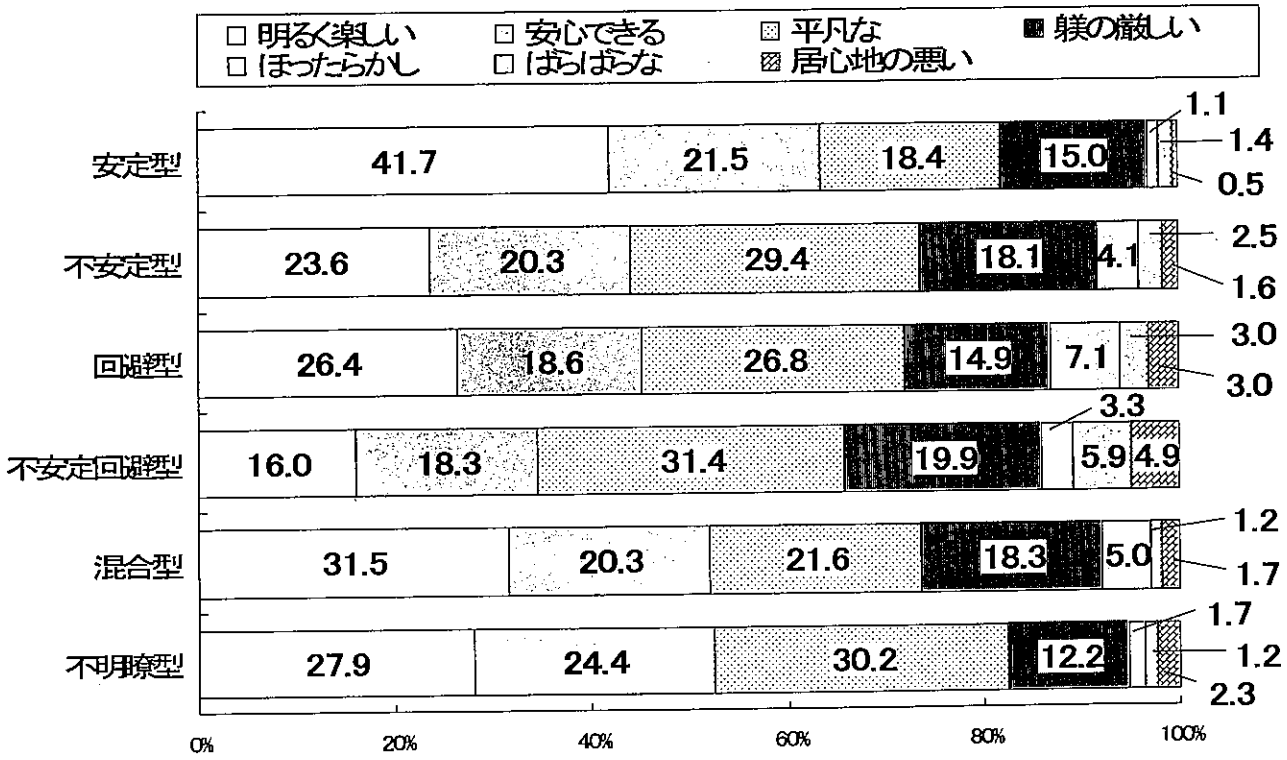

図10. 女子学生の成人期アタッチメントと家庭のイメージ

(P＜0.001)

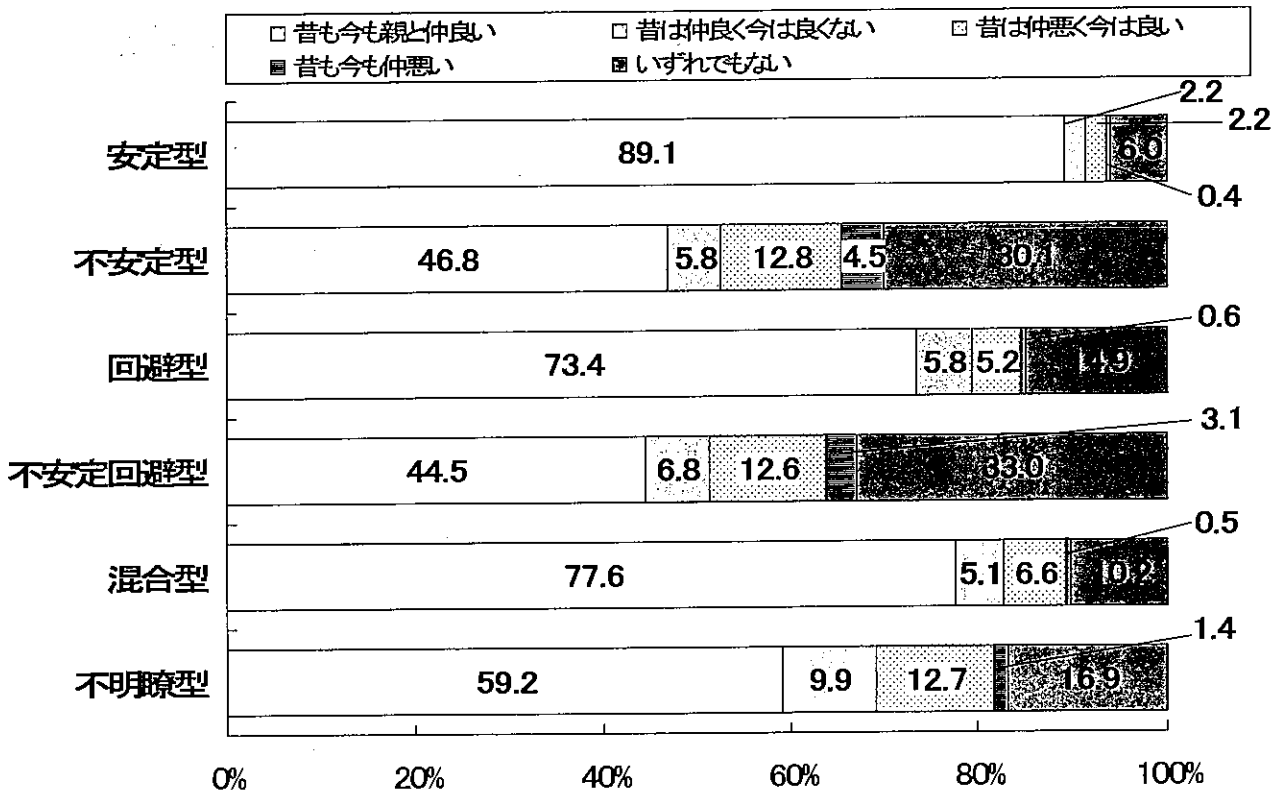

図11.男子学生の幼少期アタッチメントと親子関係

（P＜0.001）

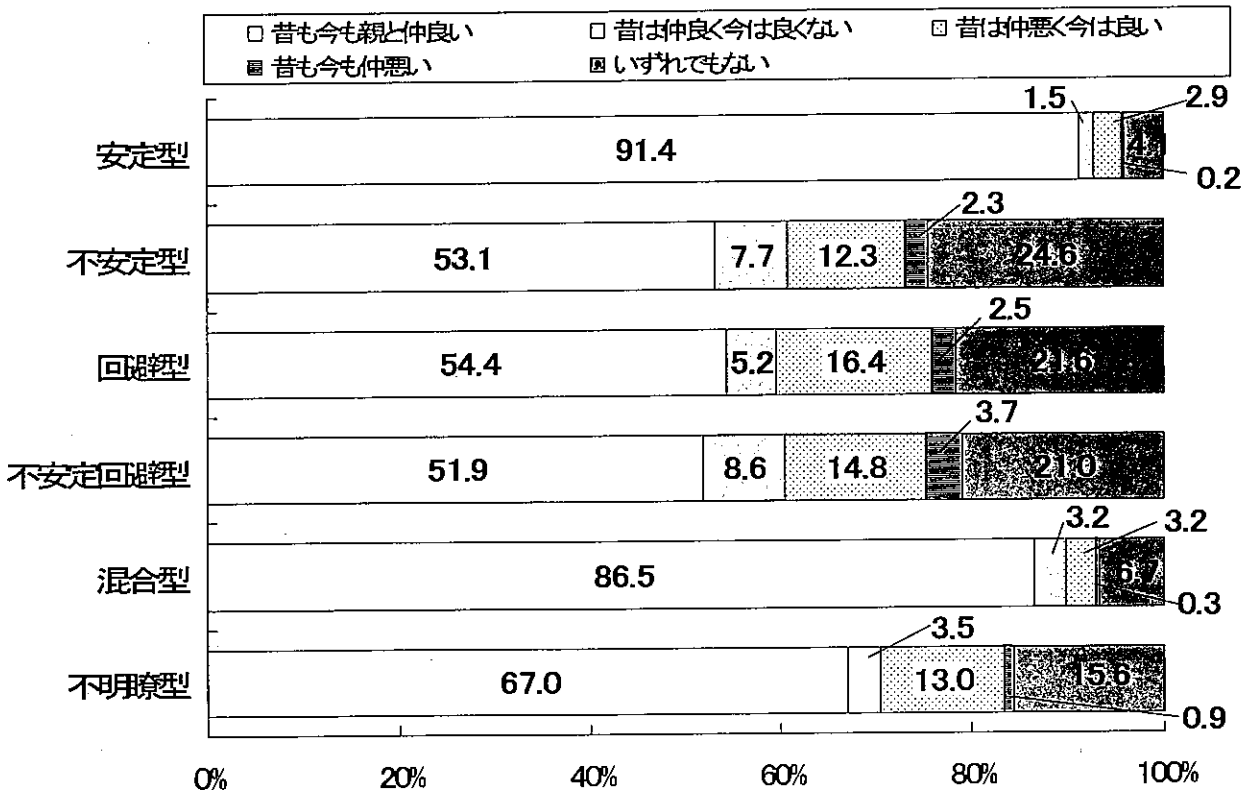

図12. 女子学生の幼少期アタッチメントと親子関係

（P＜0.001）

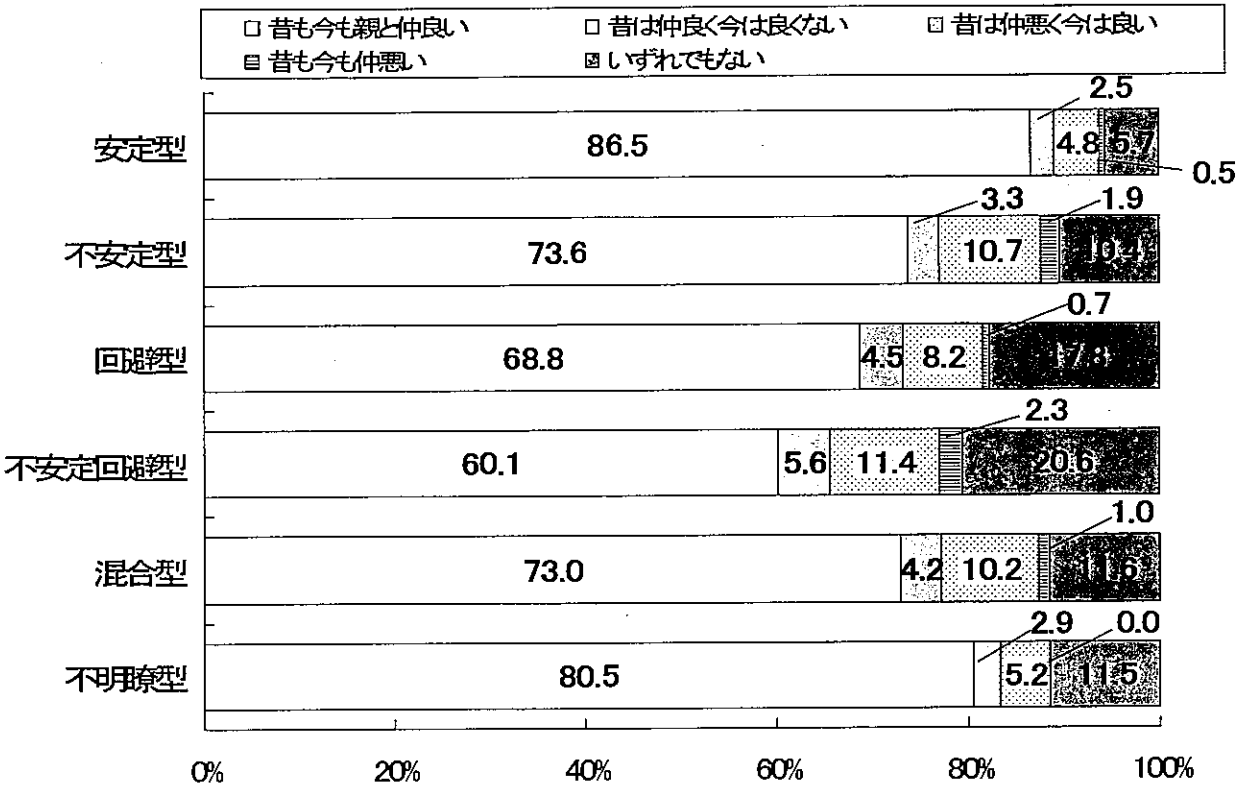

図14. 女子学生の成人期アタッチメントと親子関係

（P＜0.001）

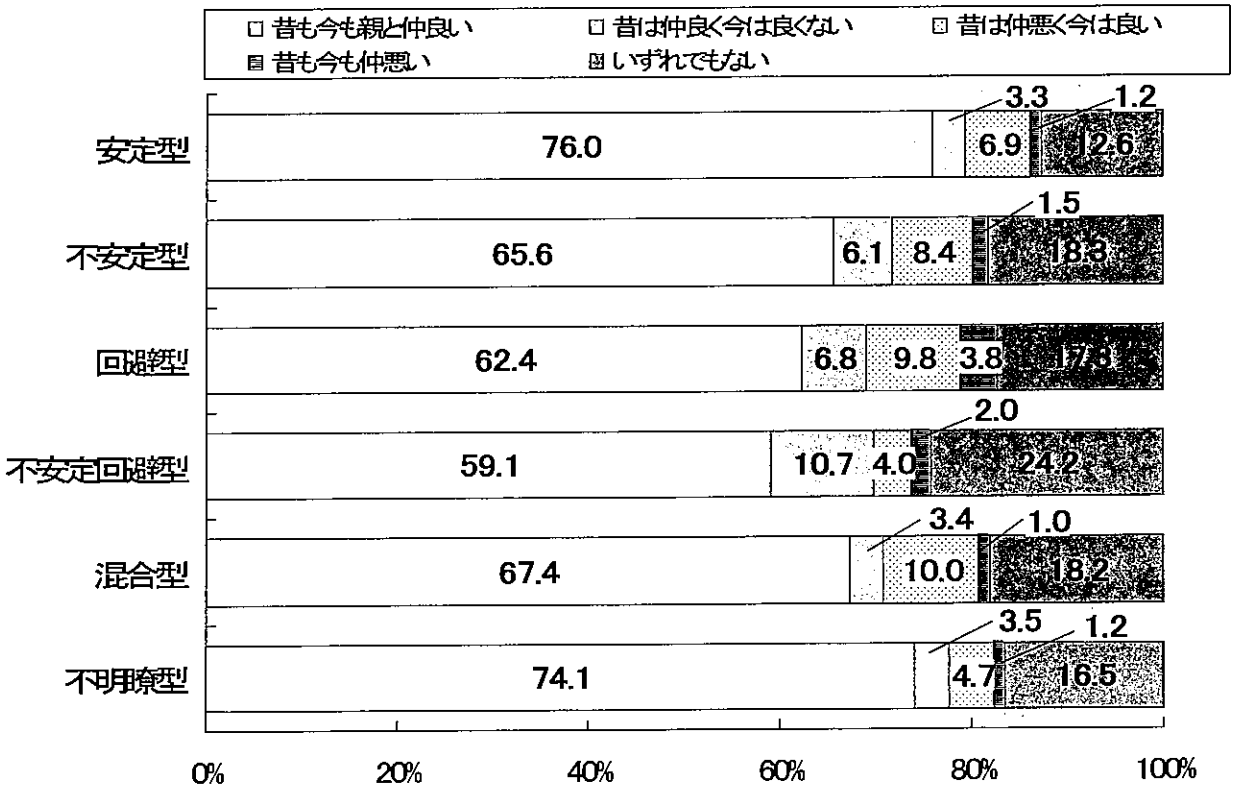

図13.男子学生の成人期アタッチメントと親子関係

（P＜0.001）

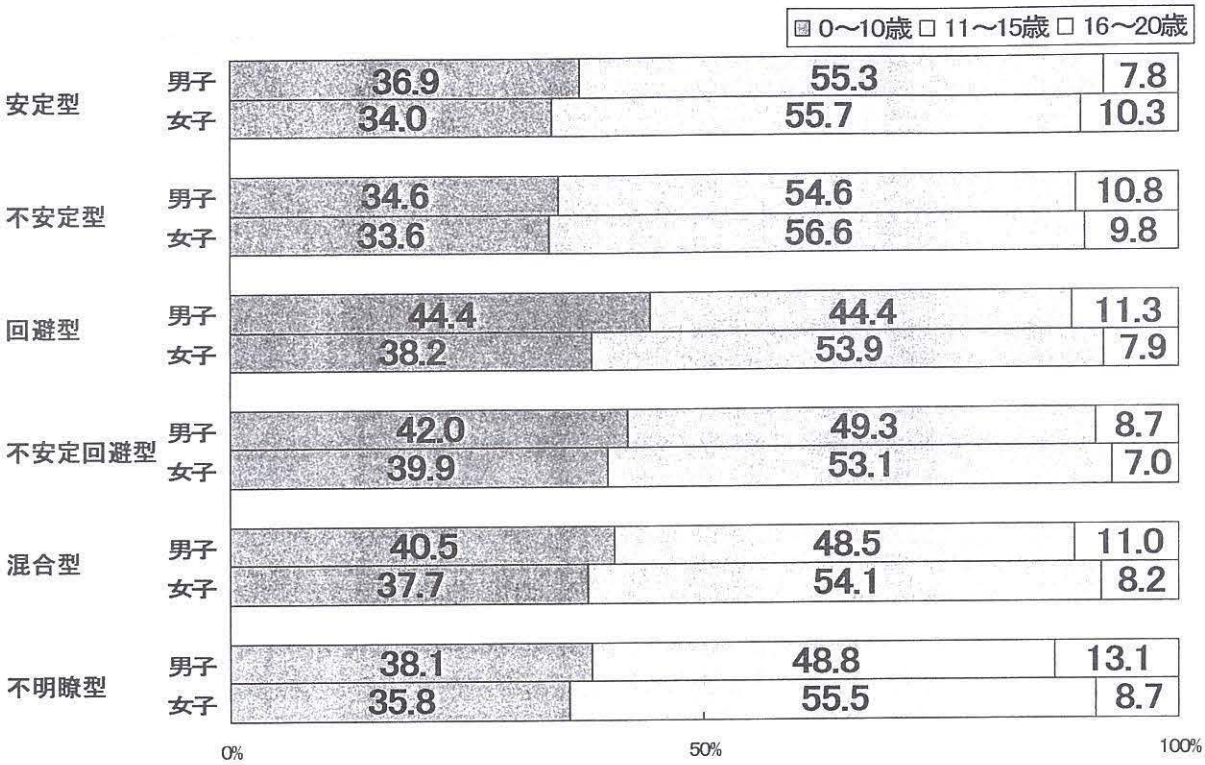

図15. 学生の成人期アタッチメントタイプと
子ども一般に対する年齢

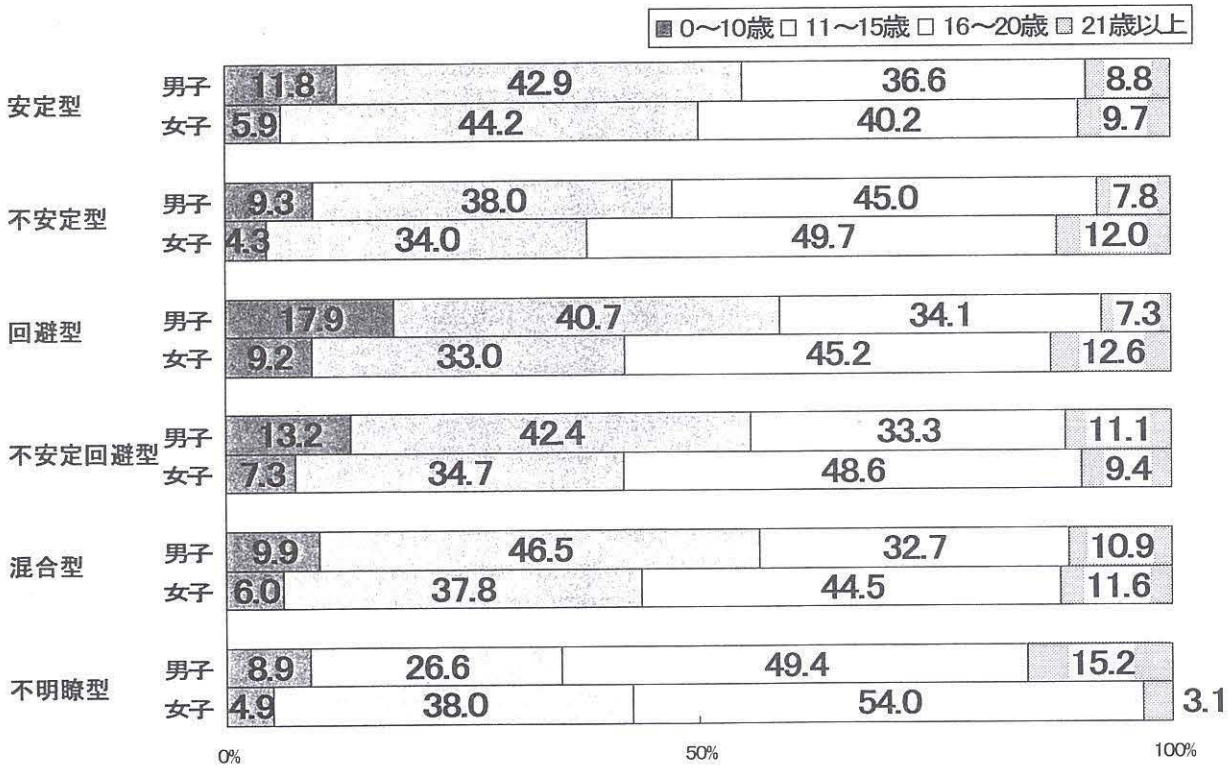

図16. 学生の成人期アタッチメントタイプと
自分が子どもだったと思う年齢

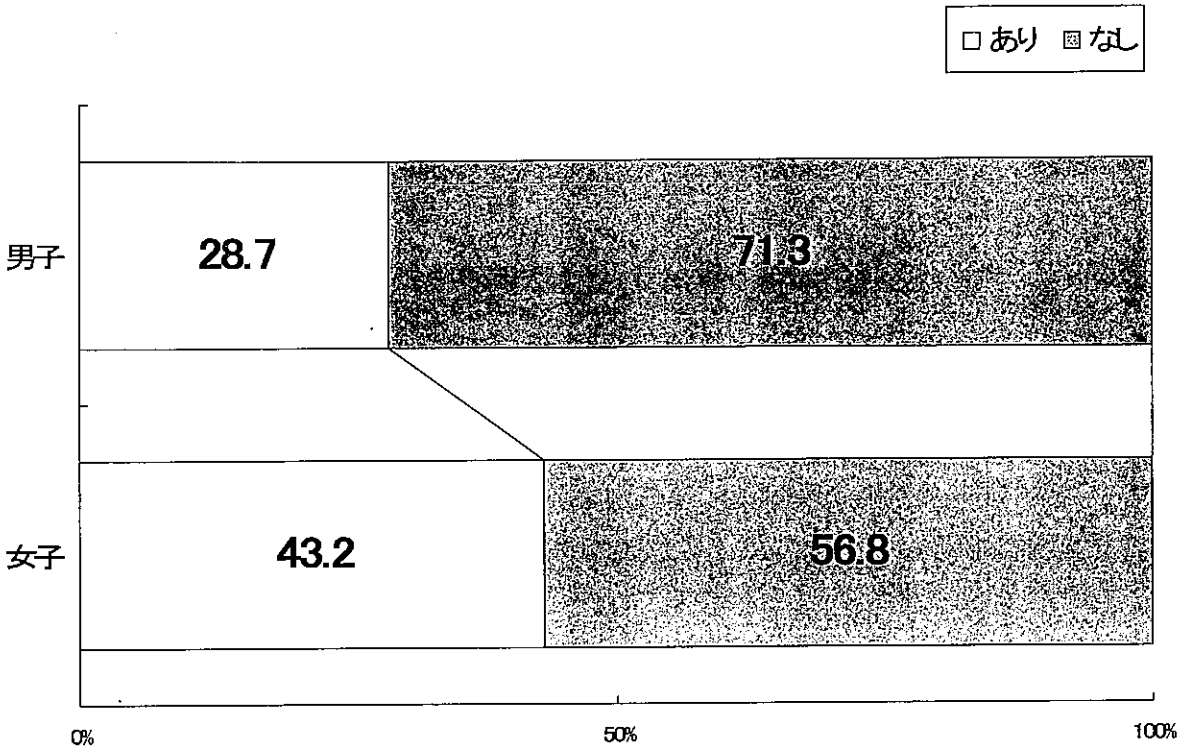

図17. 外傷体験の男女比較
(P<0.001)

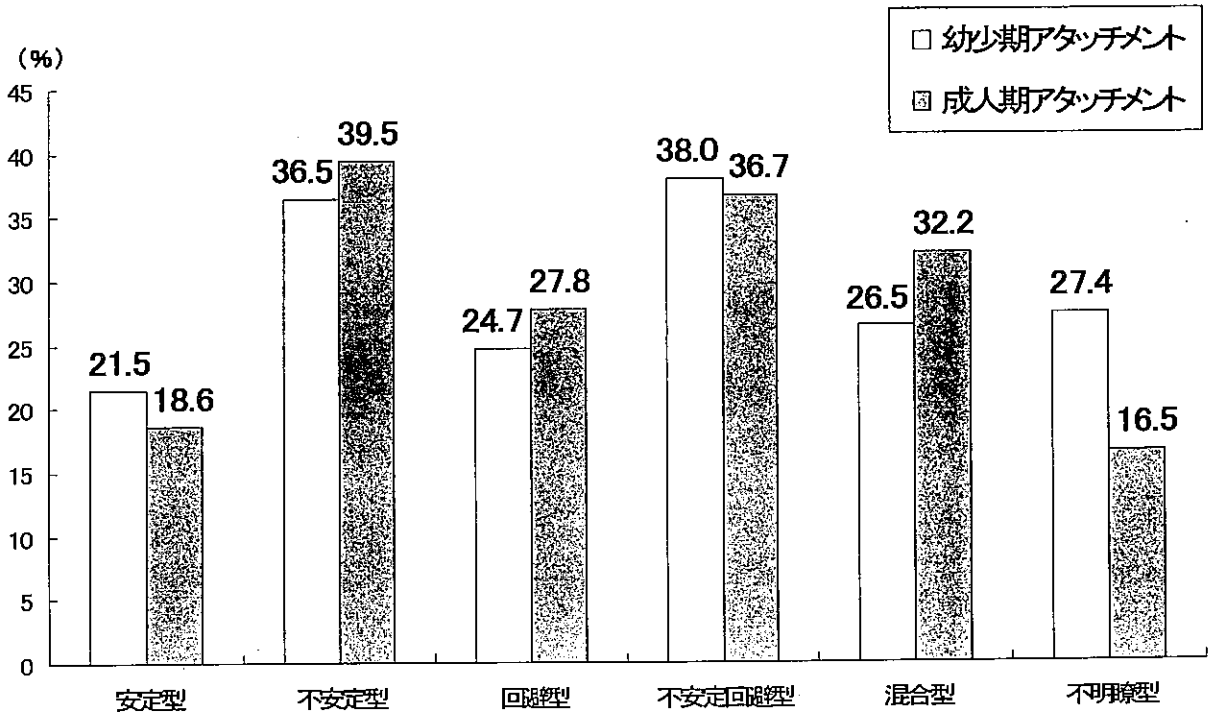

図18.男子学生のアタッチメントと外傷体験

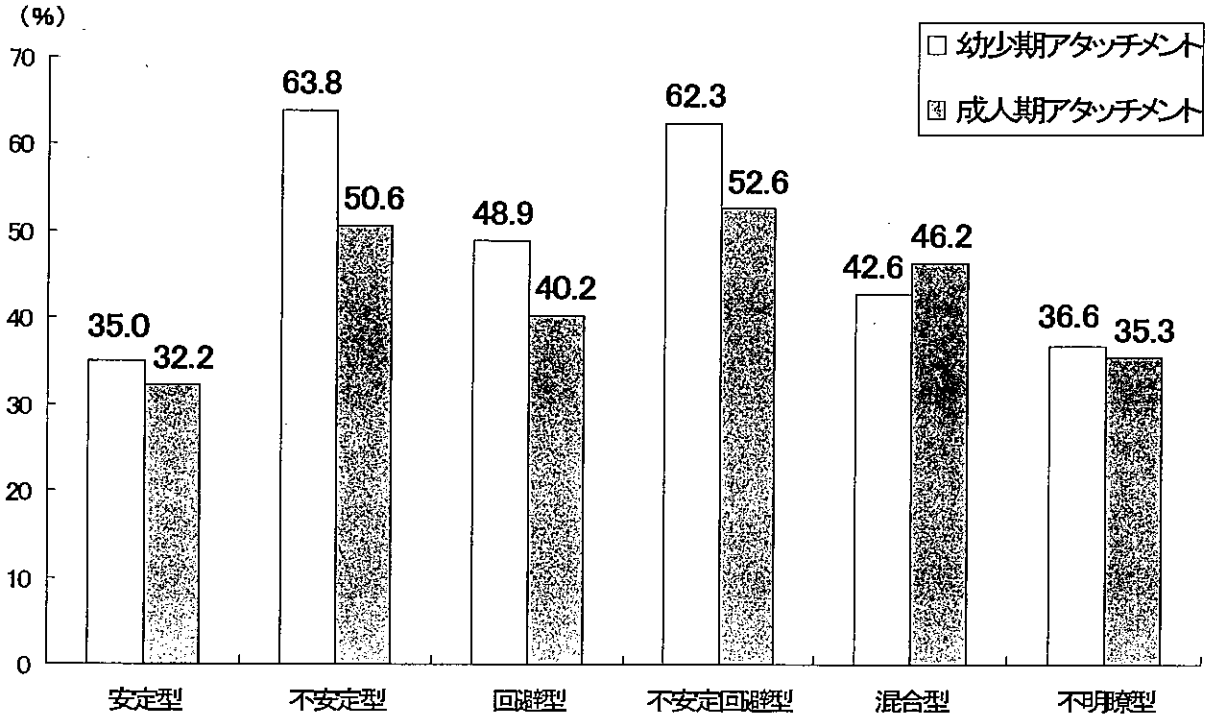

図19. 女子学生のアタッチメントと外傷体験

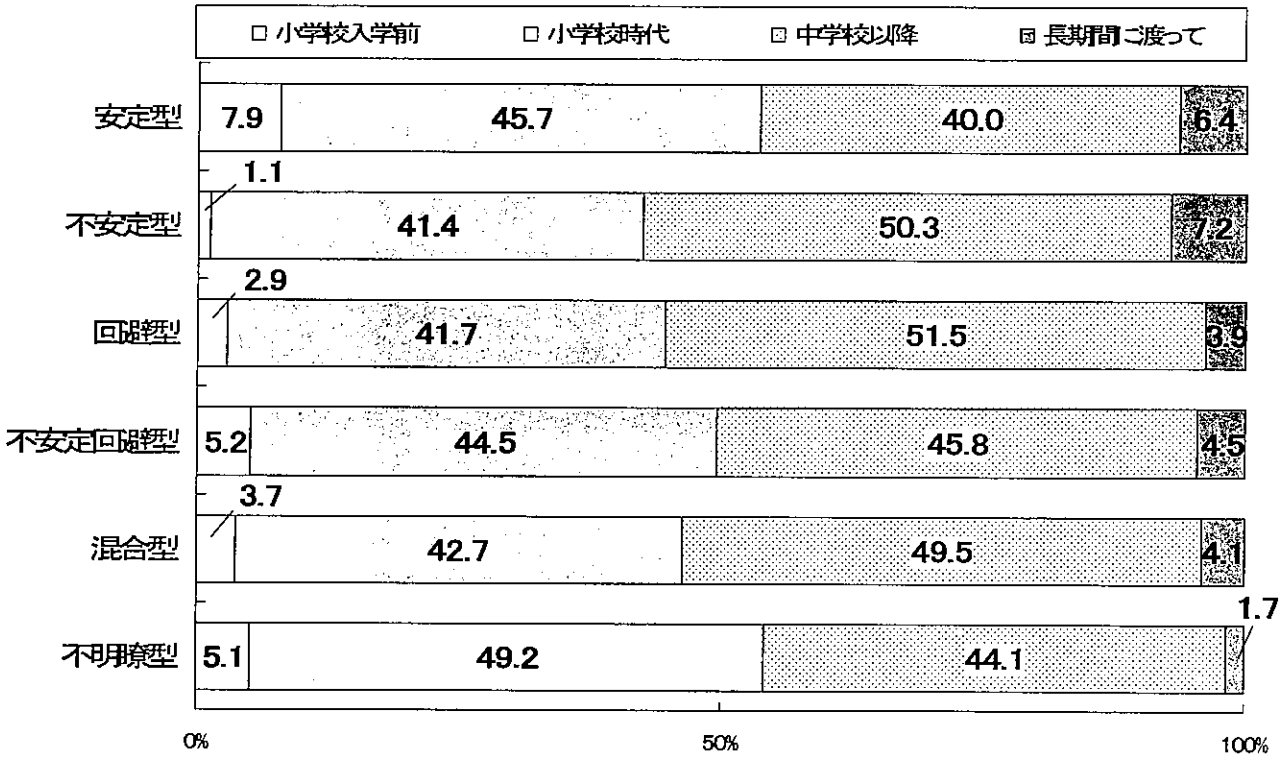

図20. 女子学生の成人期アタッチメントと受傷時期

(P＜0.001)

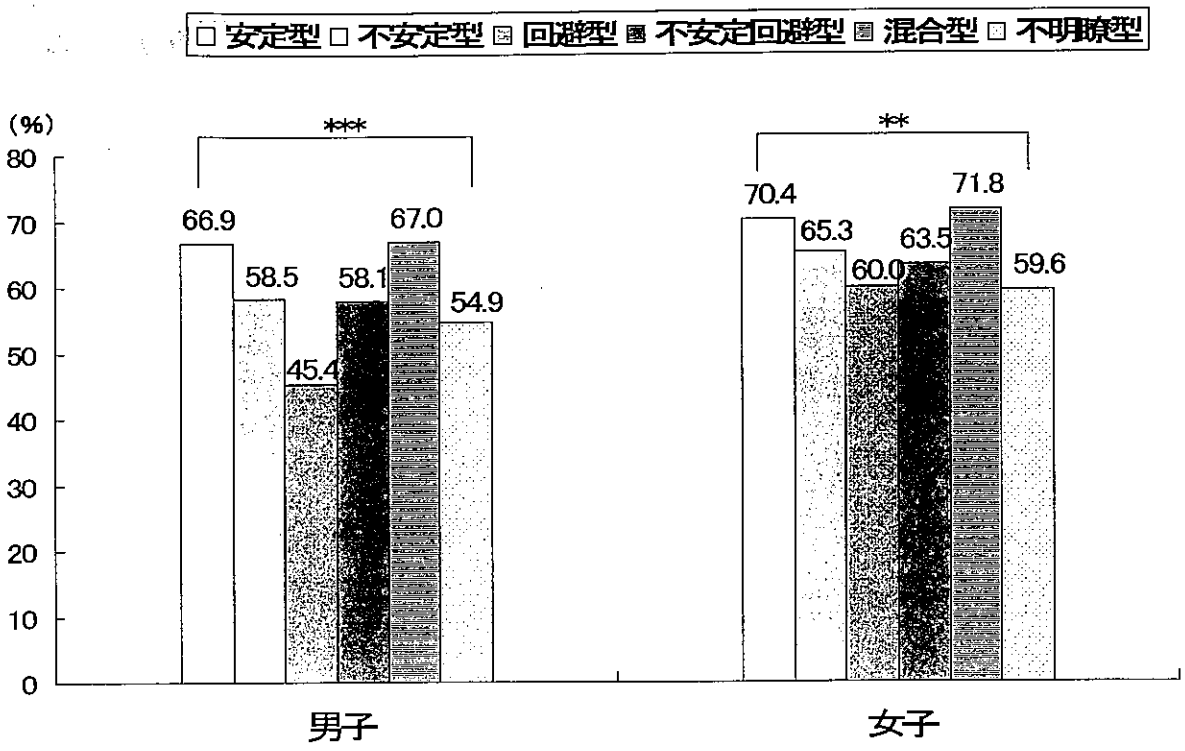

図21. 成人期アタッチメントと他者からの影響
(＊＊:P<0.01,＊＊＊:P<0.001)

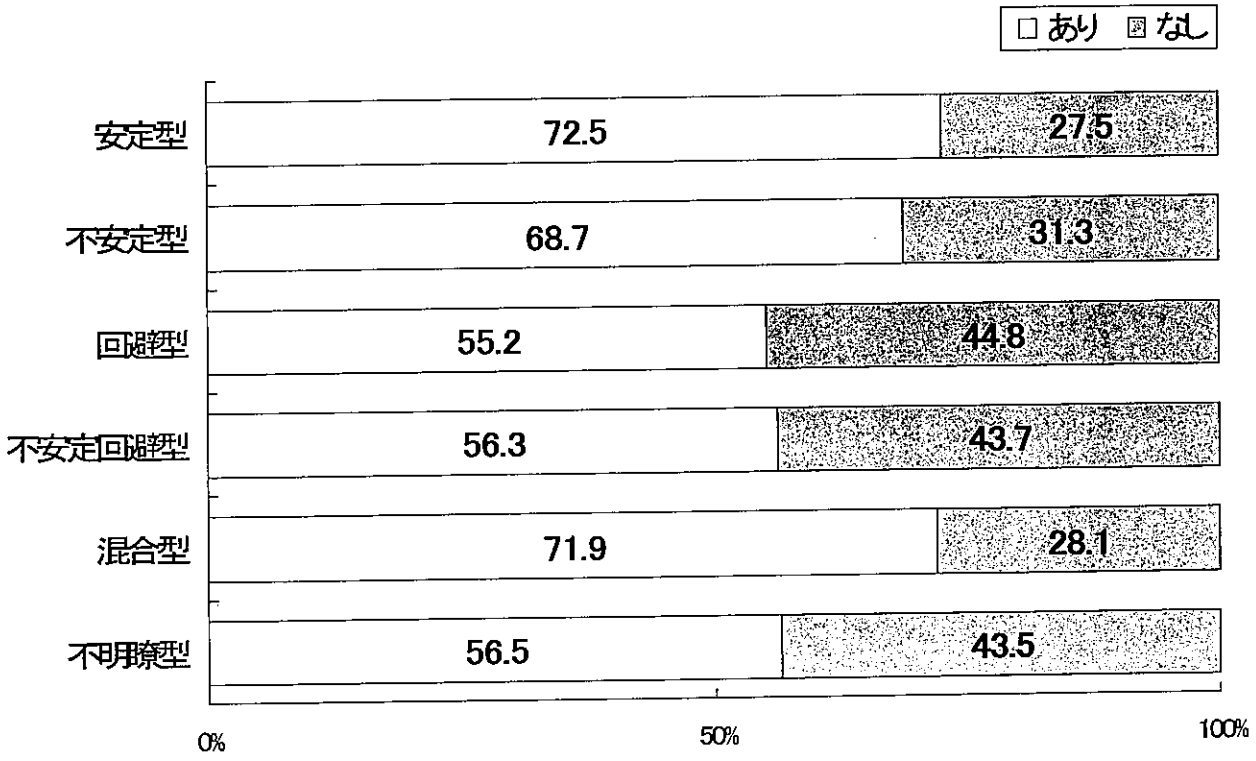

図22.男子学生の成人期アタッチメントと接触体験
(P<0.001)

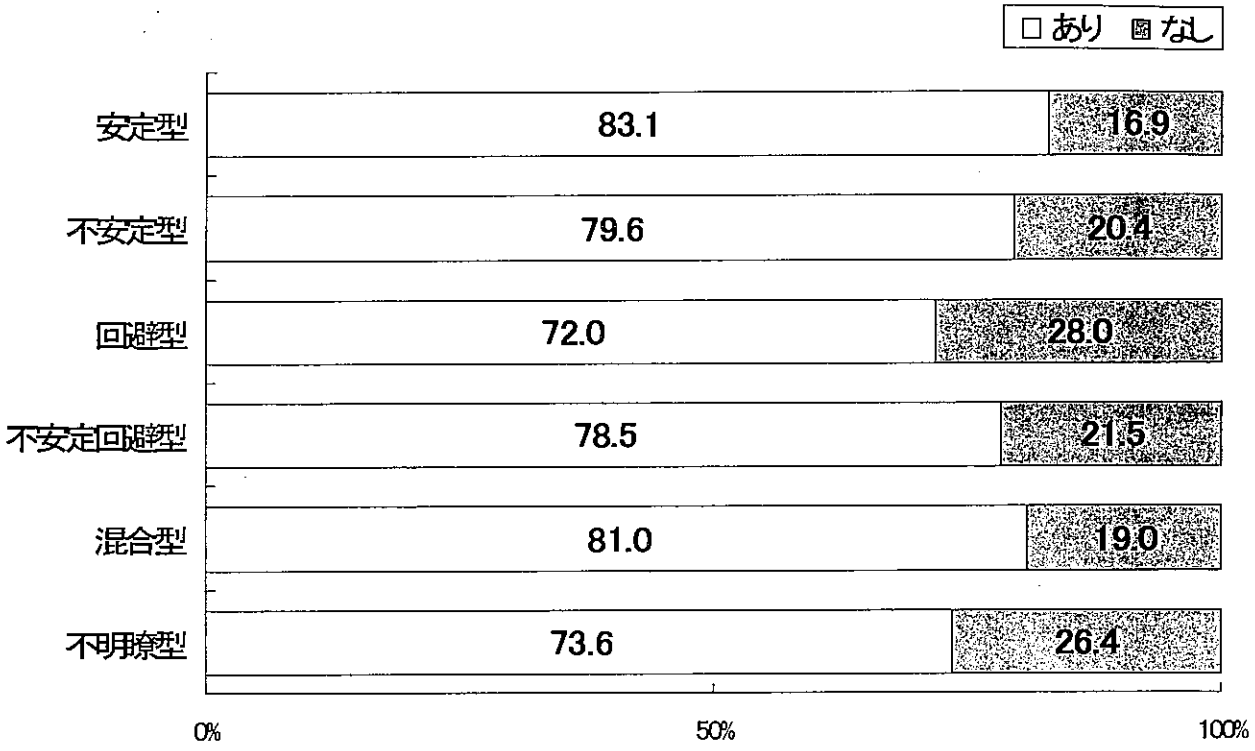

図23.女子学生の成人期アタッチメントと接触体験

(P<0.001)

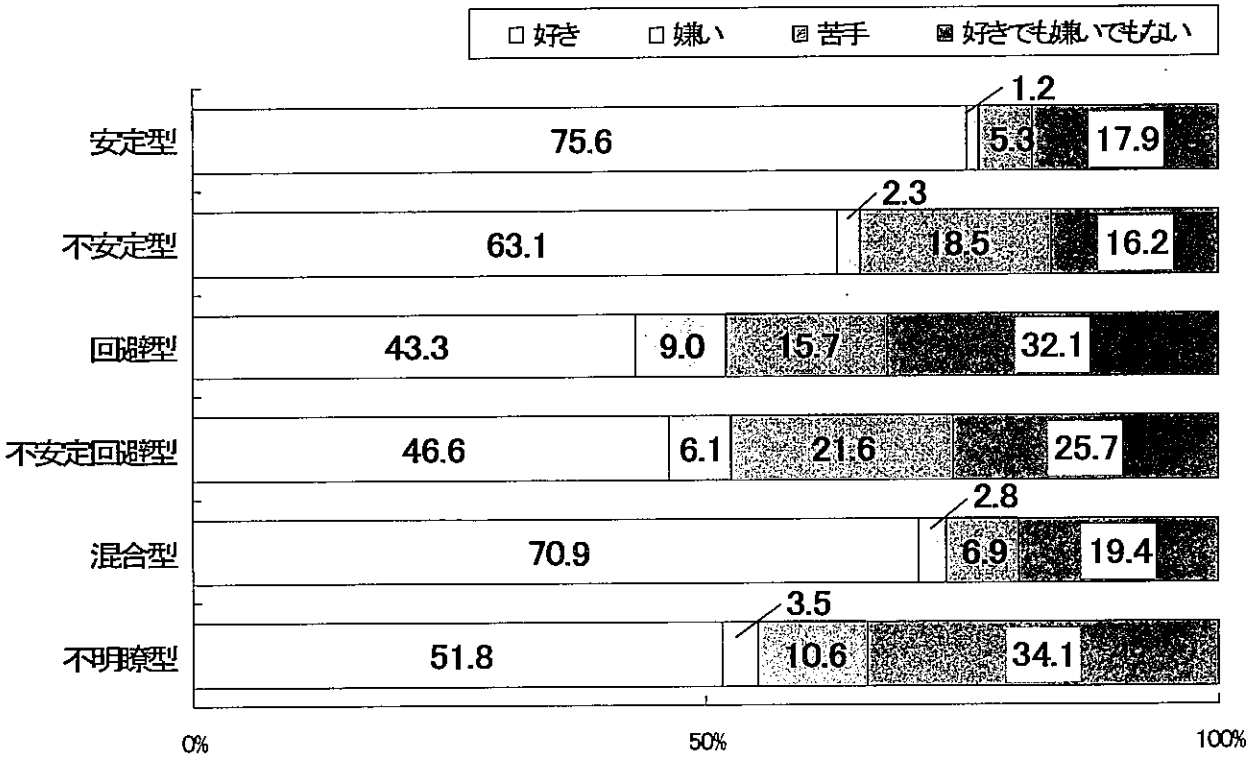

図24.男子学生の成人期アタッチメントと対児感情

(P<0.001)

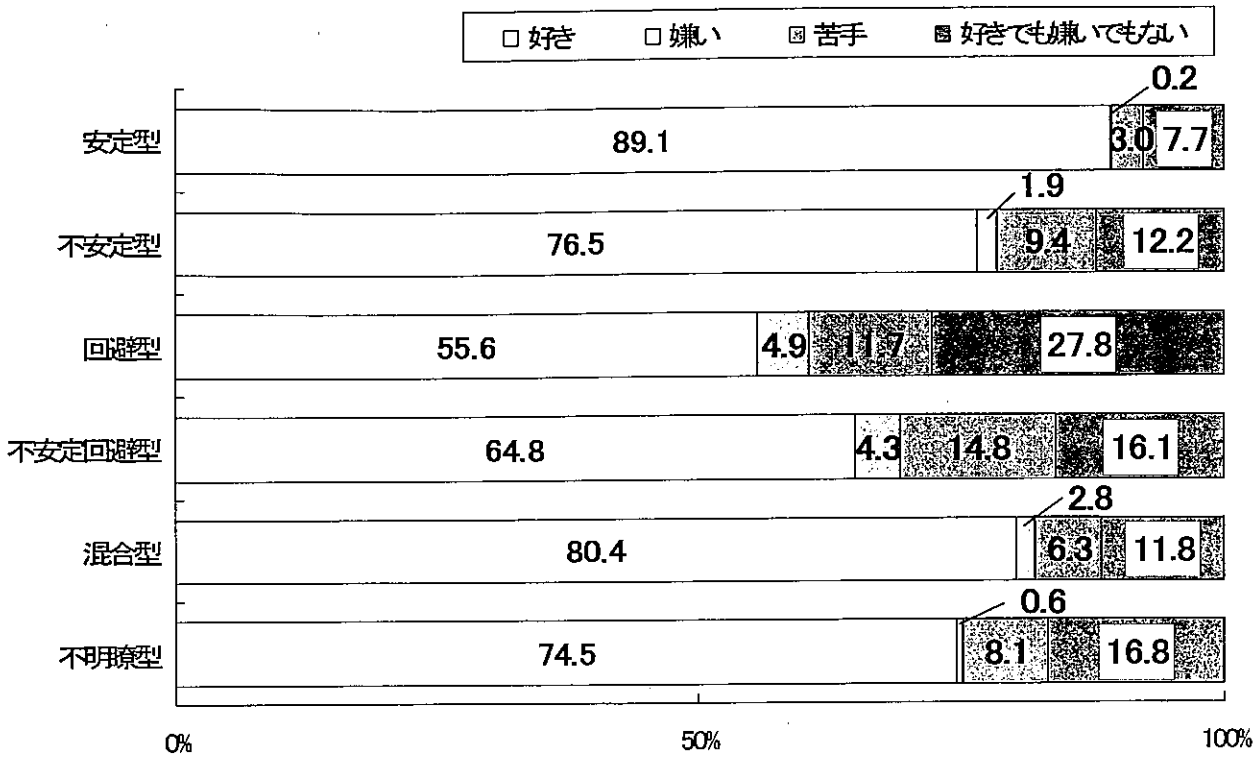

図25.女子学生の成人期アタッチメントと対児感情

(P<0.001)

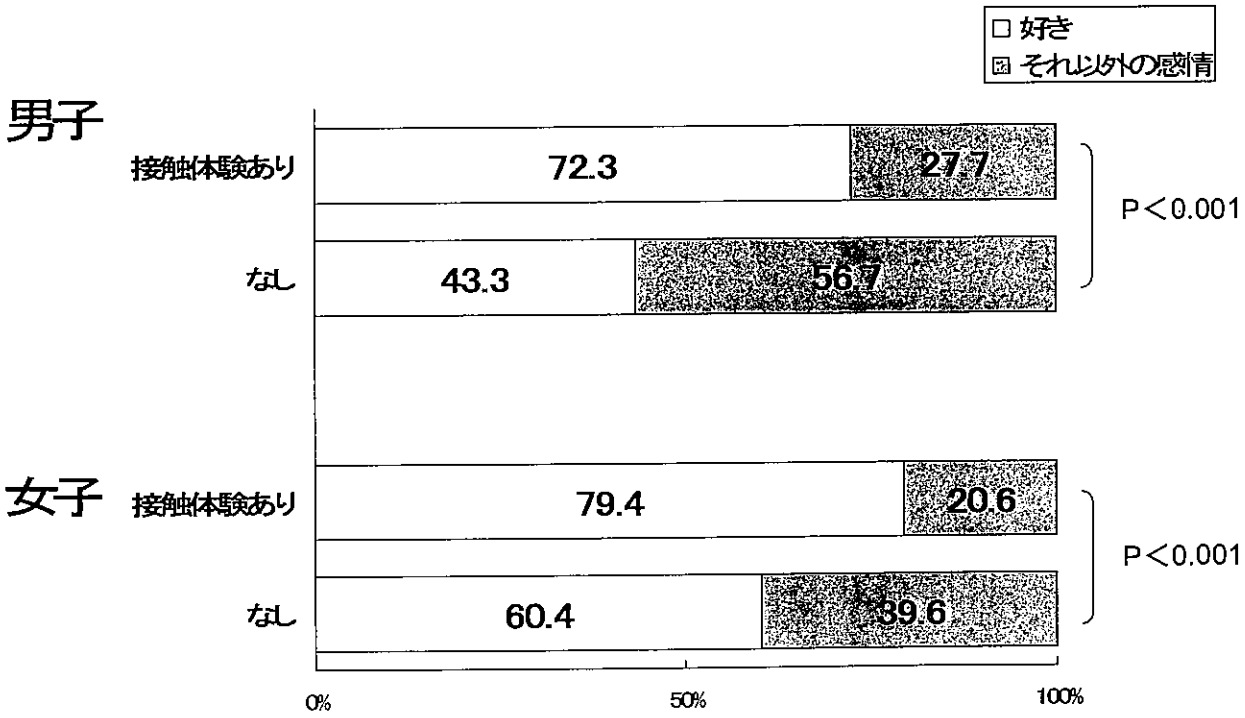

図26.接触体験の有無と対児感情

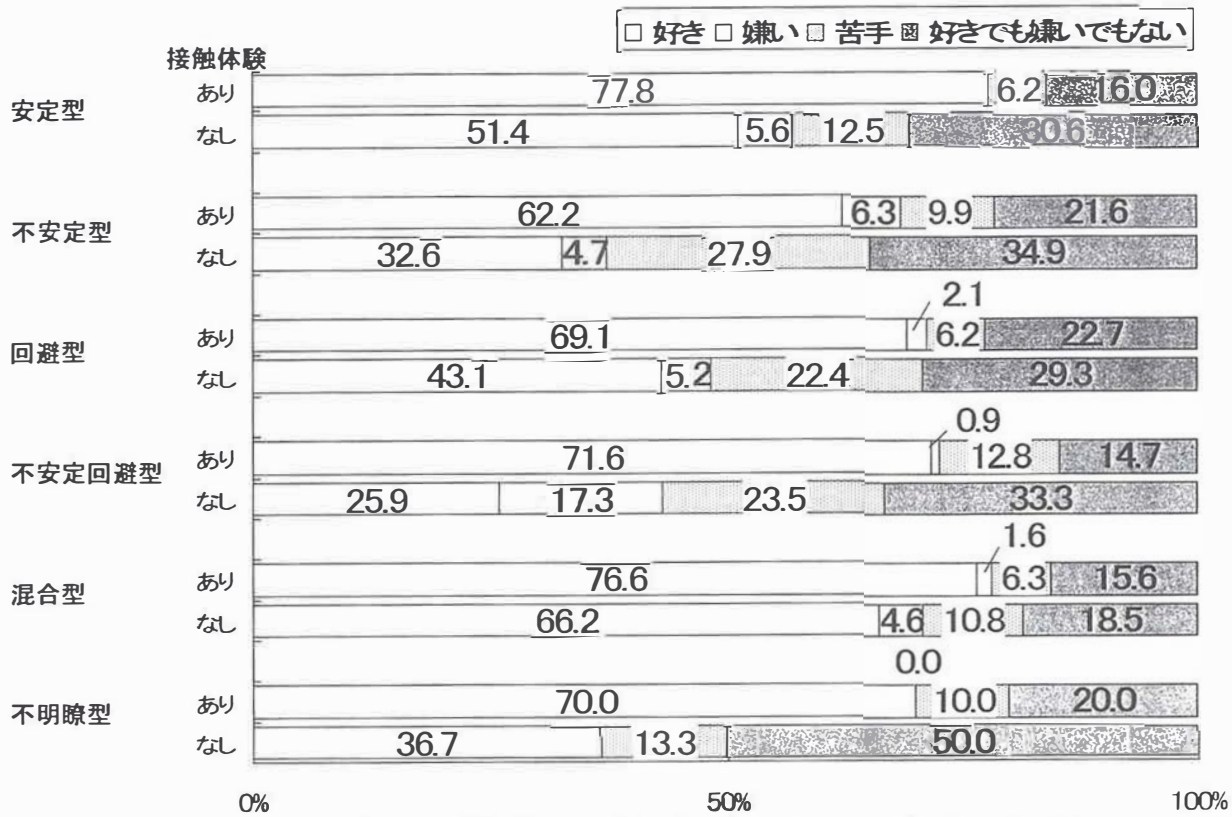

図27. 男子学生の幼少期アタッチメント別
対児感情と接触体験

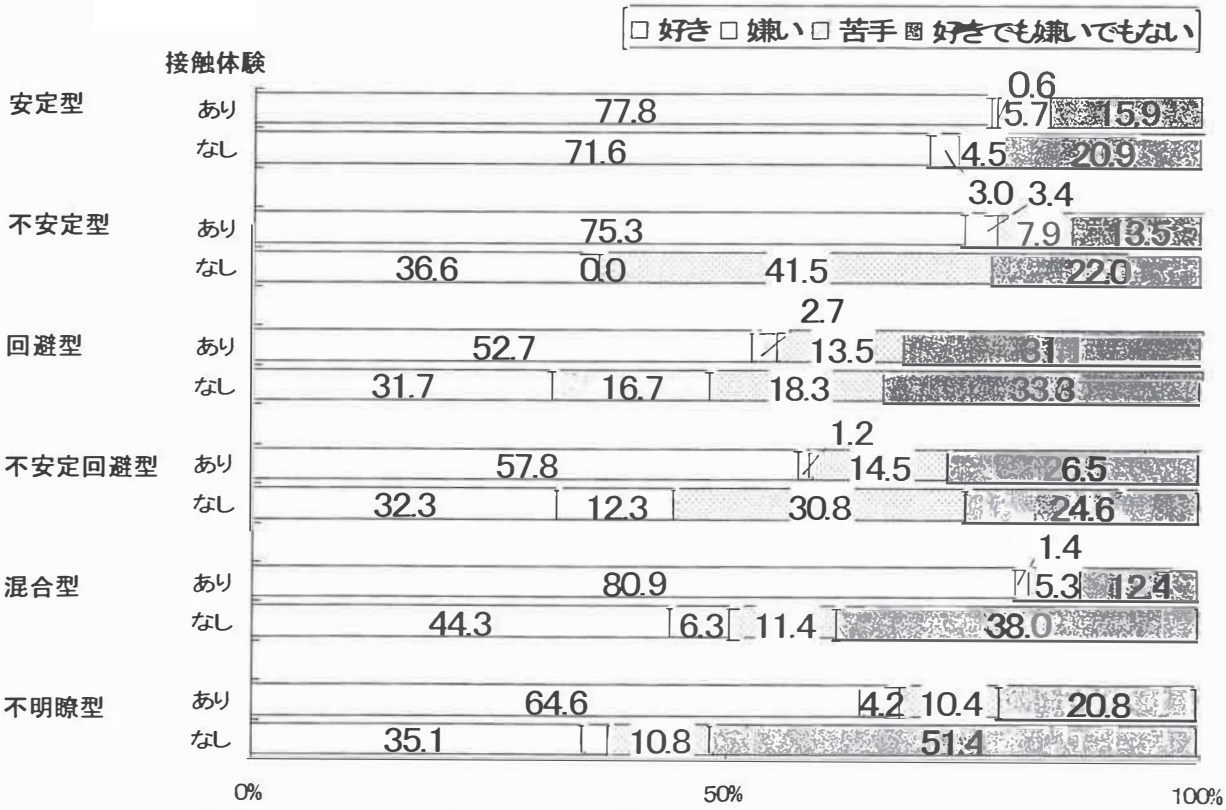

図28. 男子学生の成人期アタッチメント別
対児感情と接触体験

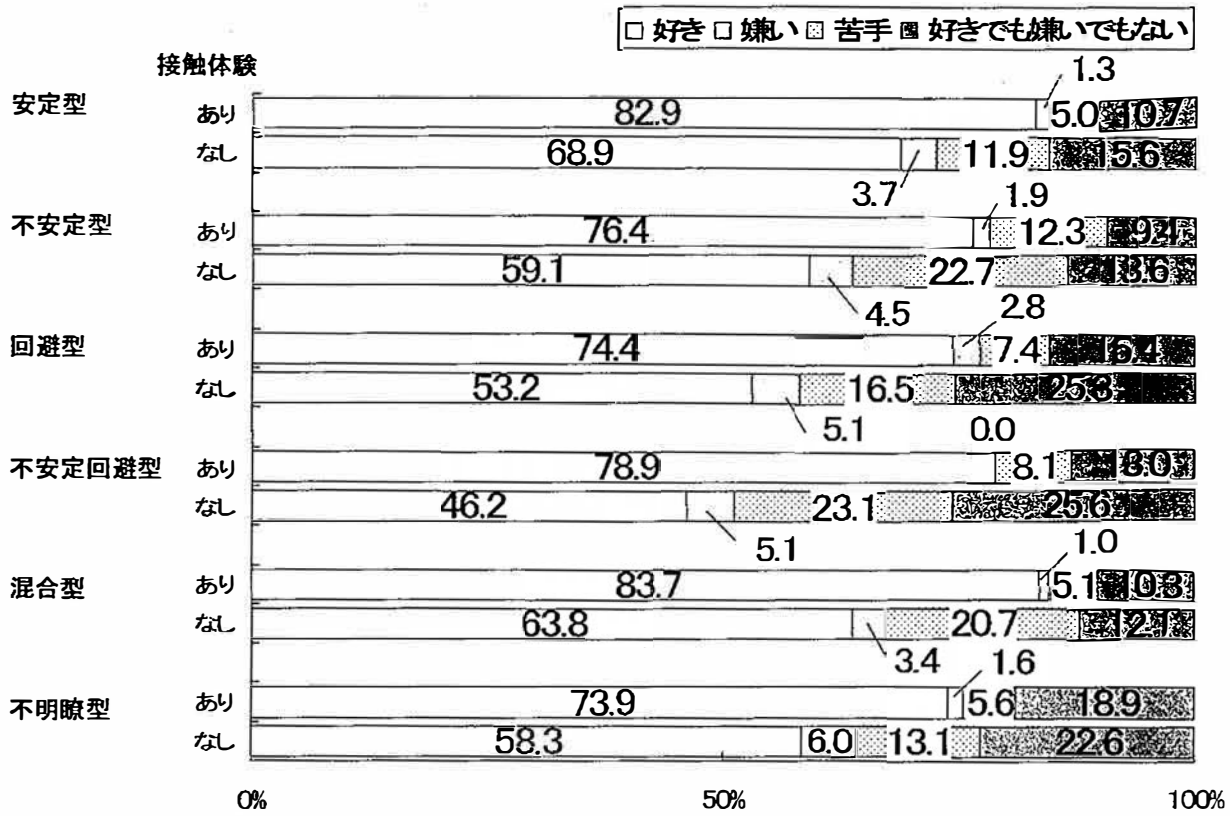

図29. 女子学生の幼少期アタッチメント別
対児感情と接触体験

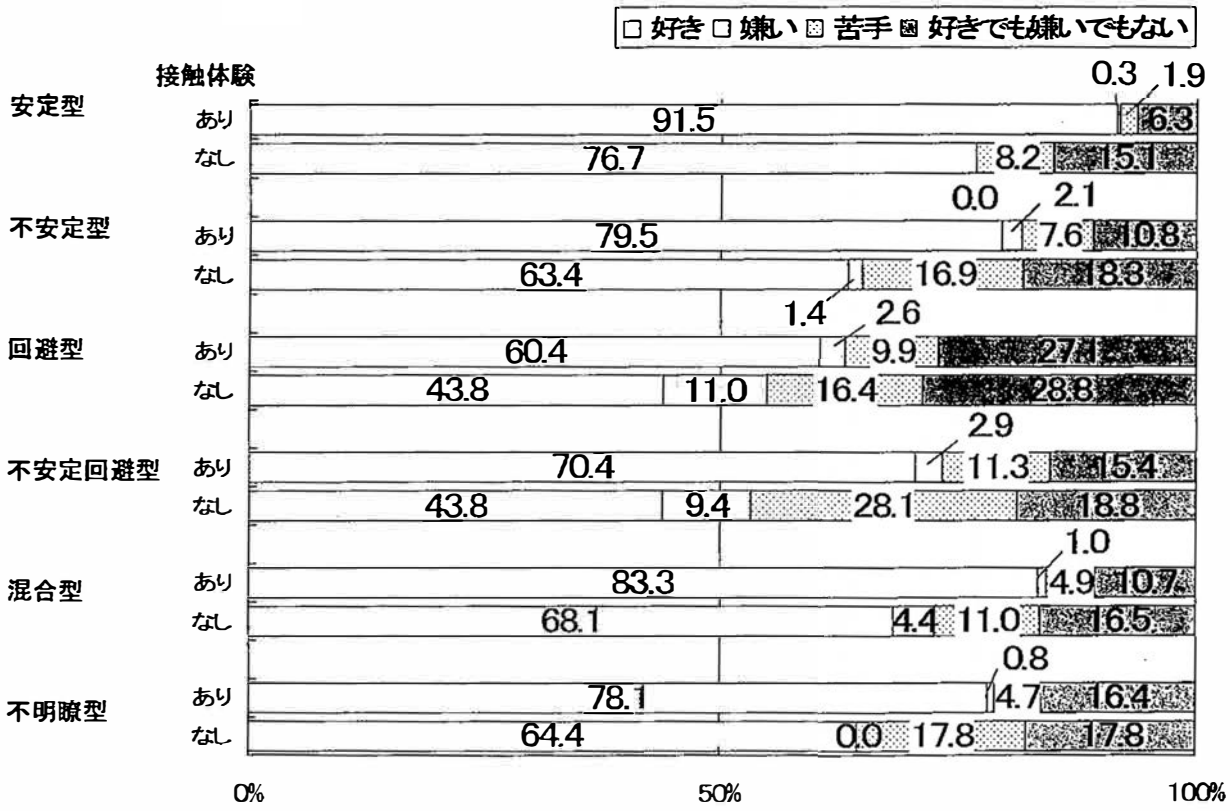

図30. 女子学生の成人期アタッチメント別
対児感情と接触体験

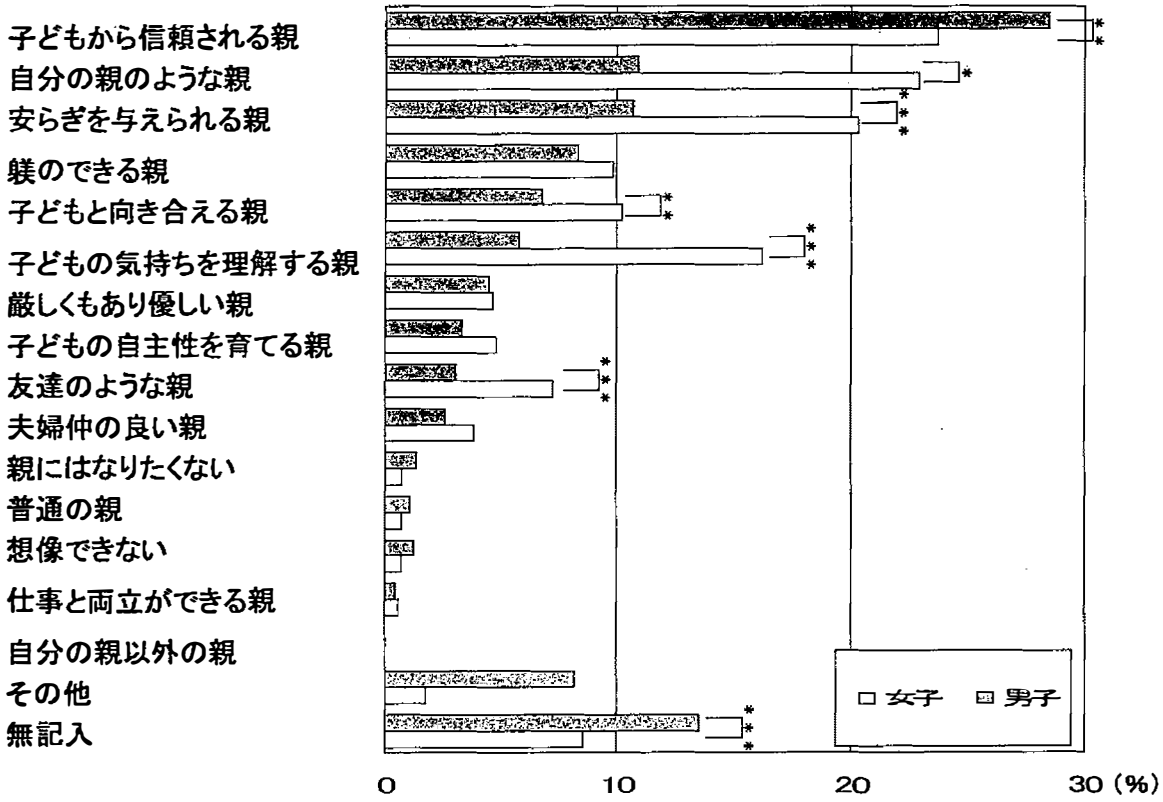

図31.学生の将来の親像(回答総数3046名)

(＊:p<0.05, ＊＊:p<0.01, ＊＊:p<0.001)

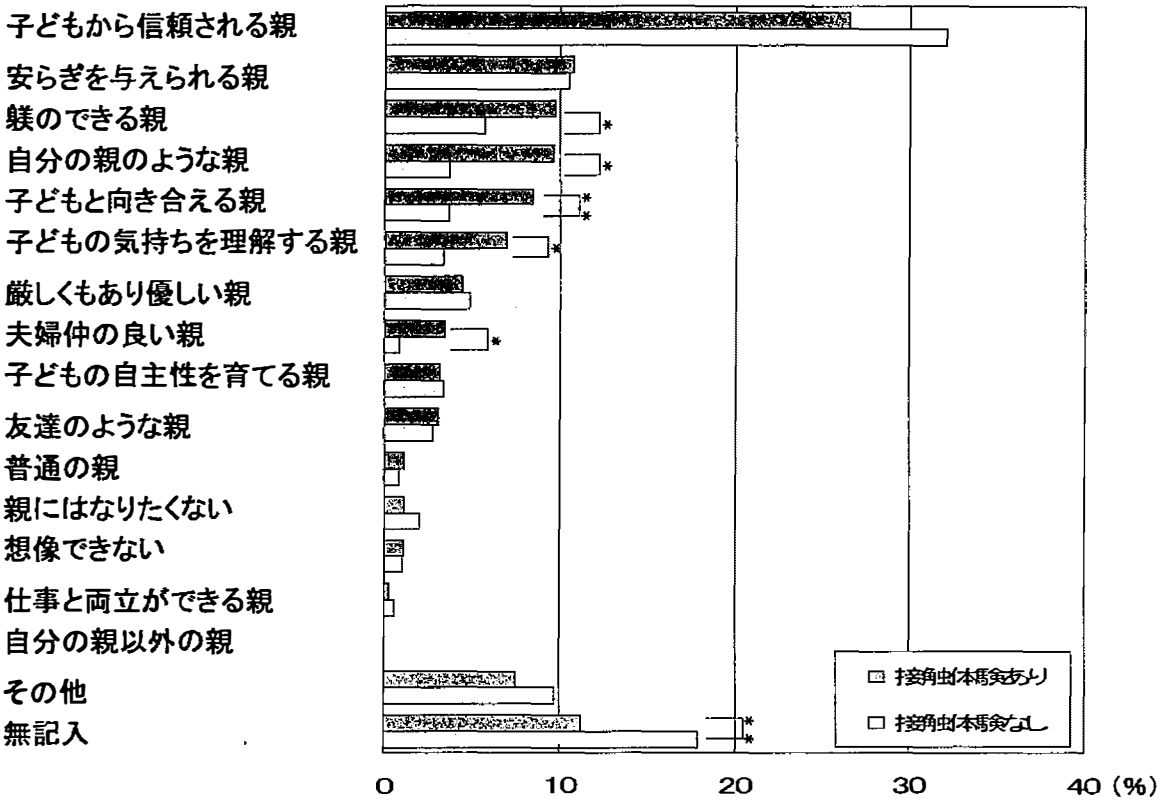

図32.男子学生の接触体験の有無と将来の親像

(回答総数1041名)(＊:p<0.05, ＊＊:p<0.01,)

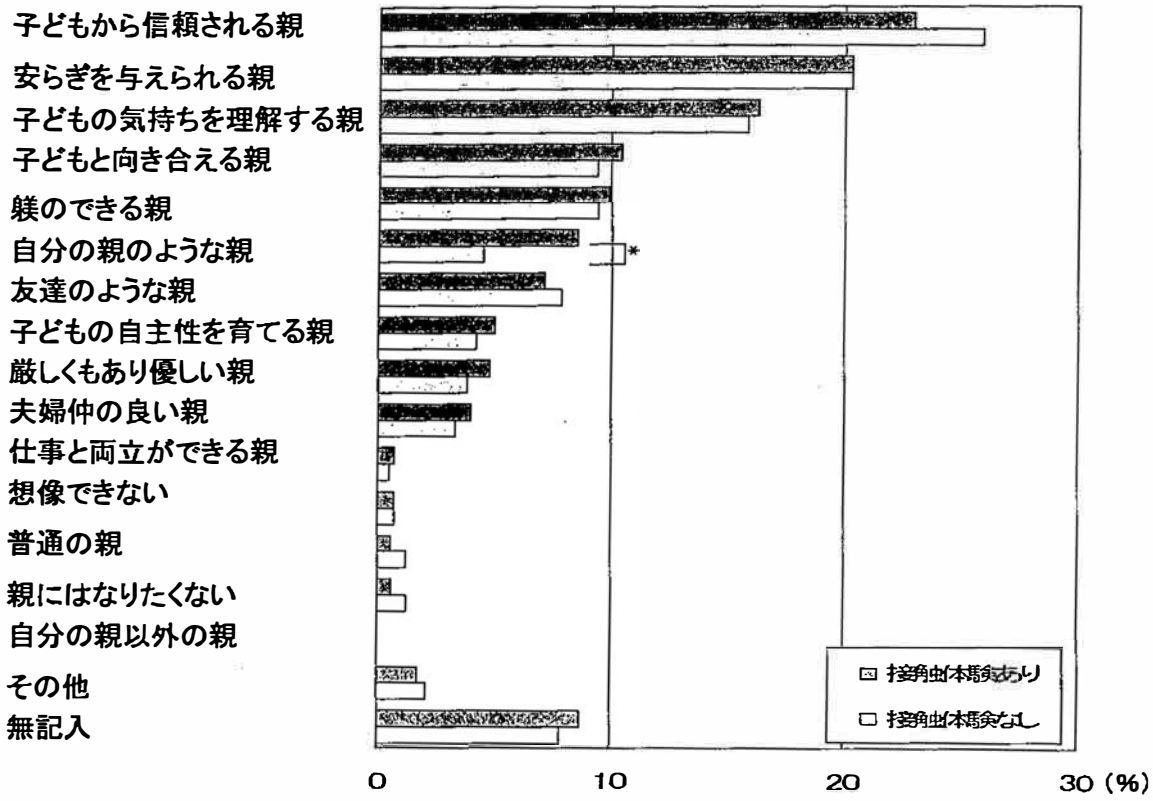

図33.女子学生の接触体験の有無と将来の親像

（回答総数2003名）（＊:p＜0.05）

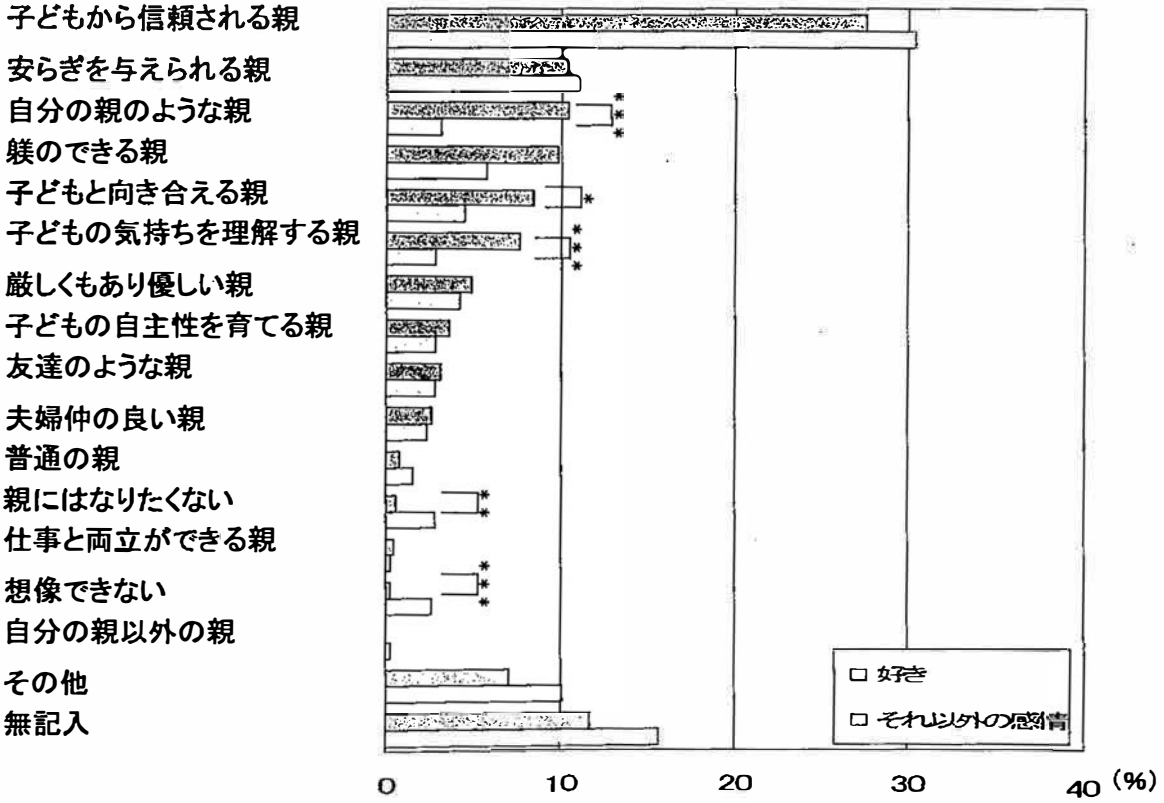

図34.男子学生の対児感情と将来の親像（回答総数1041名）

（＊:p＜0.05，＊＊:p＜0.01，＊＊:p＜0.001）

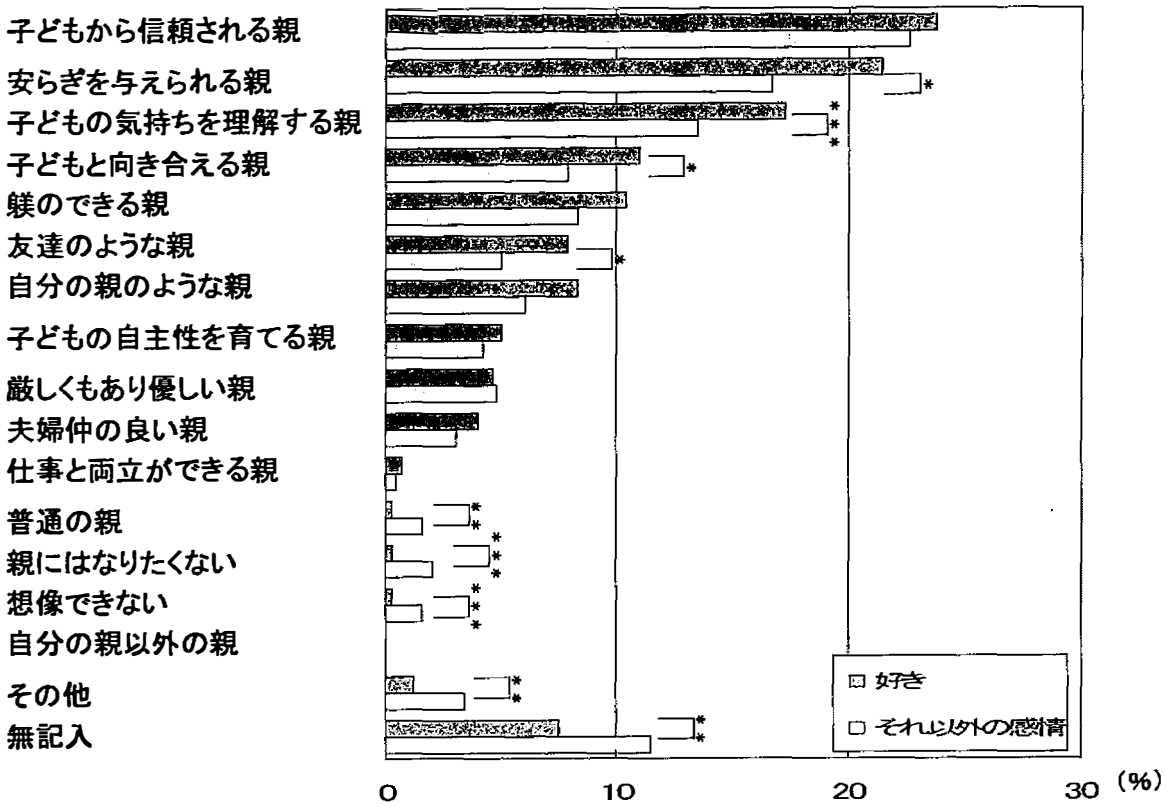

図35.女子学生の対児感情と将来の親像(回答総数2003名)
(＊:p<0.05, ＊＊:p<0.01, ＊＊:p<0.001)

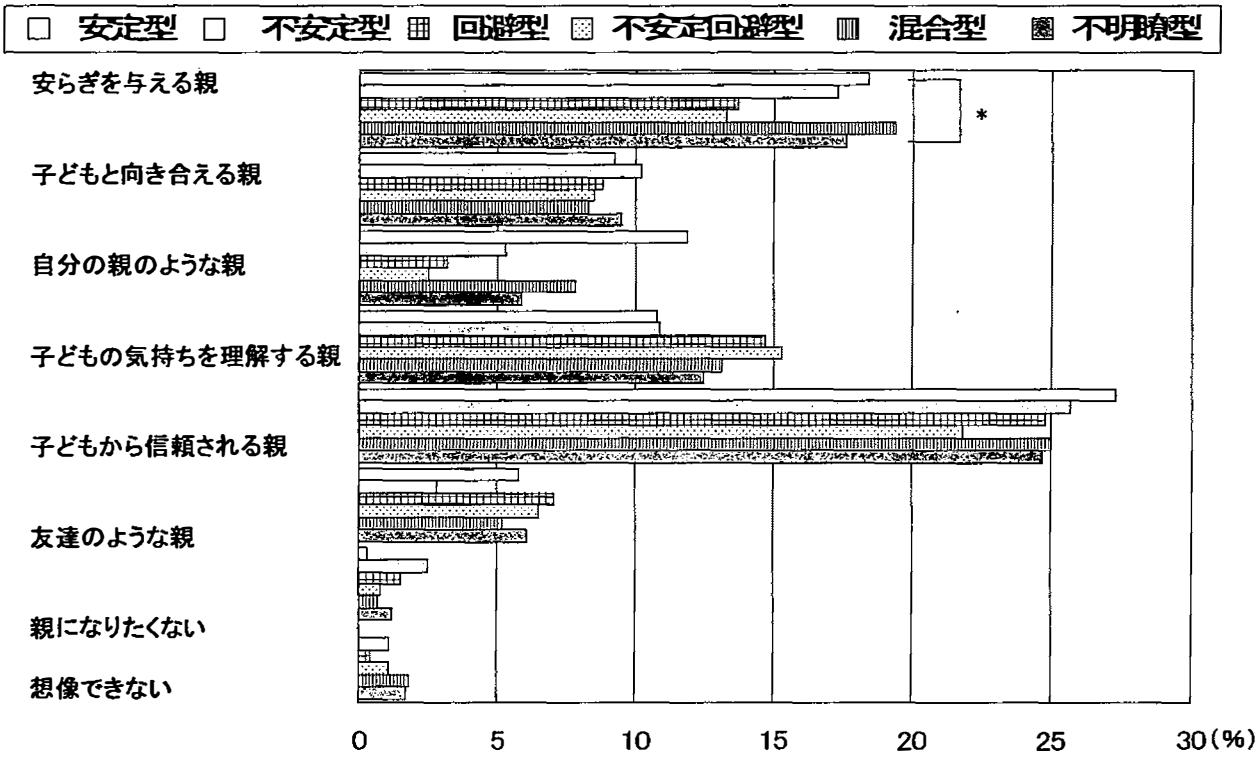

図36. 学生の幼少期アタッチメントと将来の親像

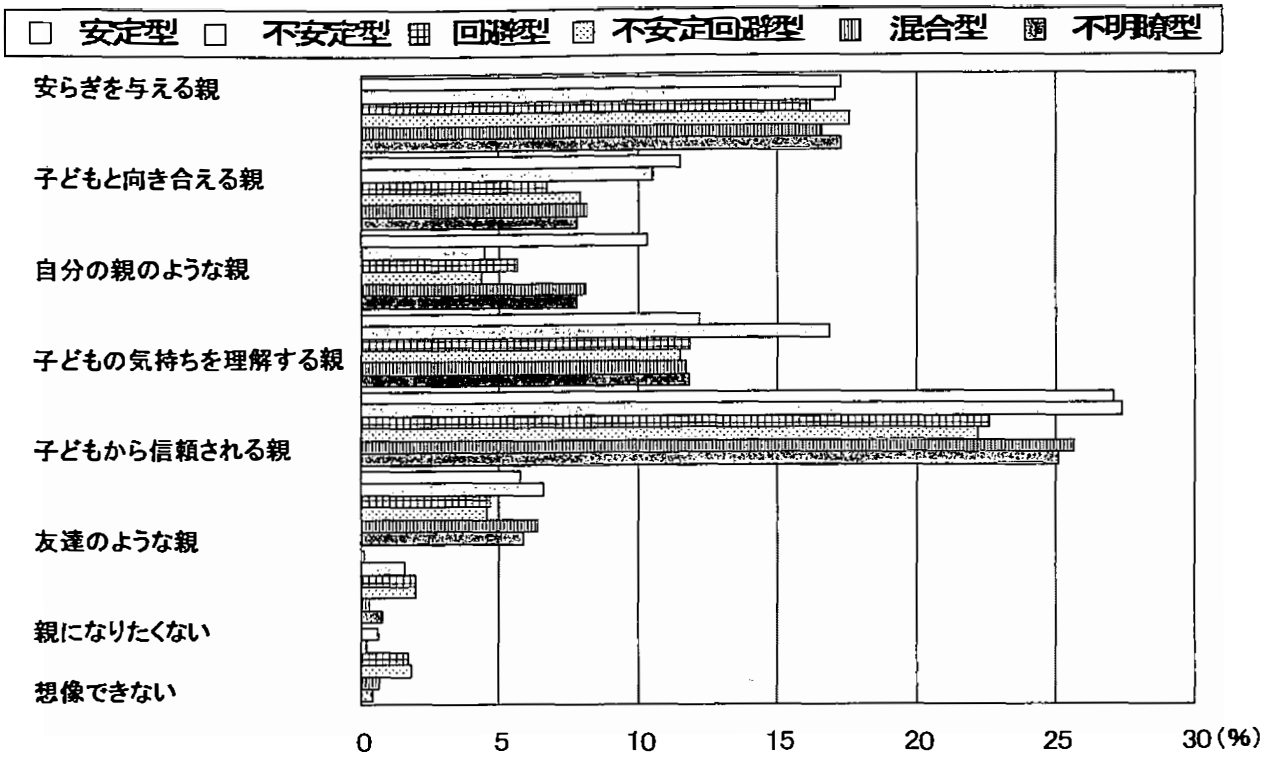

図37. 学生の成人期アタッチメントと将来の親像